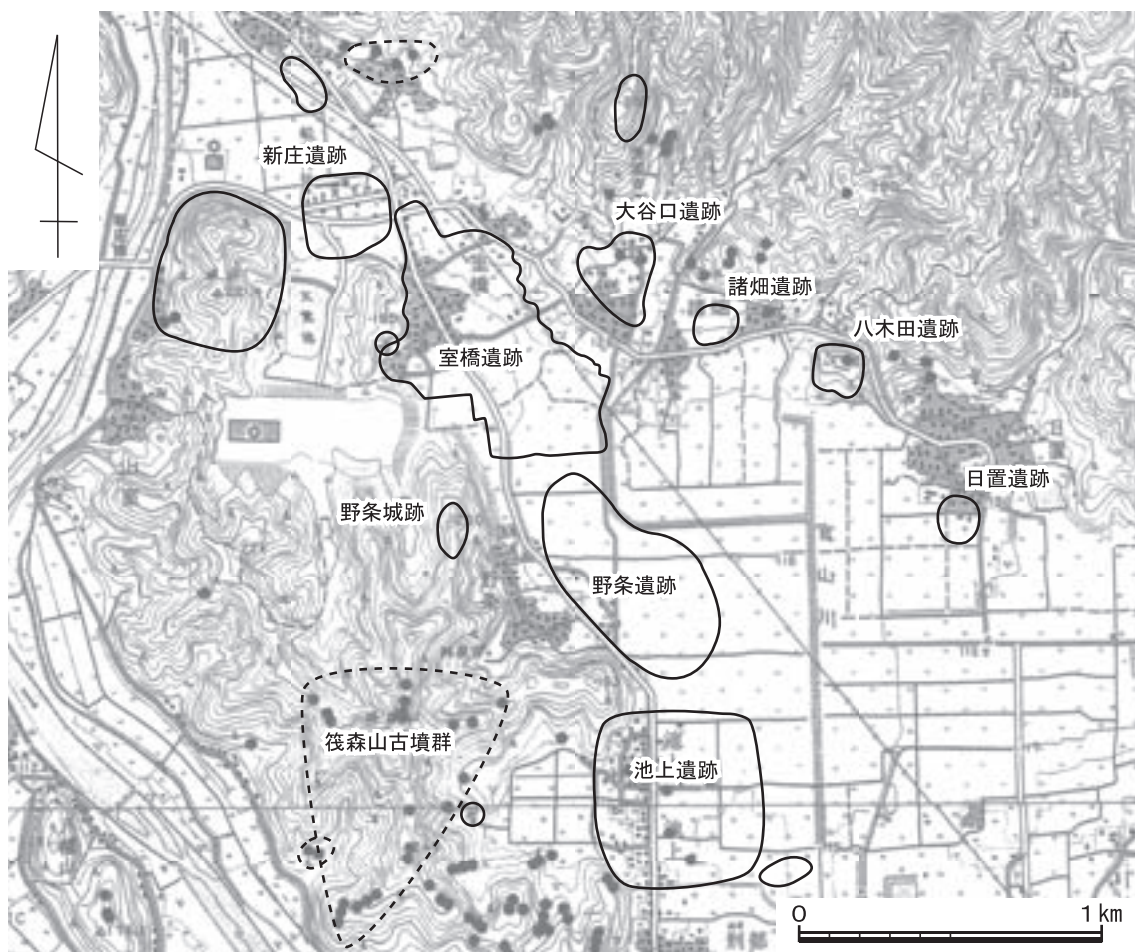


# 1.大谷口遺跡第5次発掘調査報告

## 1. はじめに

大谷口遺跡は、南丹市八木町諸畑大谷口に所在する縄文時代から中世に至る複合集落遺跡である。平成16年度に八木町教育委員会(現南丹市教育委員会)が大谷口古墳群として範囲確認調査を行い、新たに周知された遺跡である。南丹市諸畑・室橋・野条・池上地区では、平成13年度から京都府農林水産部により、府営経営体育成基盤整備事業「川東地区」のは場整備事業が進められており、今回の調査は同事業の一環で実施したものである。

大谷口遺跡は大堰川(桂川)の左岸地域にあり、亀岡盆地北端に位置する。当遺跡は、諸木山(標高496.9m)の裾部の緩やかな傾斜地に形成された遺跡であり、周辺には弥生時代から中世にかけての遺跡が稠密に分布する。弥生時代の集落は、大谷口遺跡の南方に、池上遺跡や野条遺跡が分布するが、前者は弥生時代中期における亀岡盆地の拠点集落であり、後者では弥生時代後期後



第1図 調査地および周辺遺跡分布図(国土地理院 1/25,000 殿田・亀岡)

葉の焼失住居などが検出されている。また室橋遺跡では、弥生時代と推定される大規模な溝が検出されている。遺跡の東側には、天井川を形成し小尾根状を呈している官山川を挟み、諸畑遺跡が立地する。諸畑遺跡は、弥生時代から中世にかけての集落遺跡で、弥生時代後期～古墳時代前期の竪穴式住居跡や、古墳時代中期の近畿地方でも最古段階の造り付け竈をもつ住居跡が検出されている。歴史時代の遺跡としては、野条遺跡と室橋遺跡で、奈良～平安時代の灌漑用水路とみられる溝群が検出され、周辺の広い範囲で耕地開発が行われたことが判明している。前者では平安時代後期の条里型地割に沿う建物跡群が検出され、後者では奈良時代～平安時代前期にかけての大形建物群が検出されている。また、当遺跡の北側の谷奥に立地する清源寺は、11世紀後半の建立とされ、江戸時代後期の木喰上人による十六羅漢像をもつ曹洞宗の寺である。

大谷口遺跡では、過去4次にわたる調査が実施された(第2図)。第1次調査は、平成16年度に八木町教育委員会が大谷口古墳群(7基)の1・2号墳の調査を行ったものである。1号墳の調査では古墳の兆候は確認されず、中世遺構を検出し、また2号墳については、墳丘状の高まり周辺でのトレンチ調査により、縄文時代後期の遺構や遺物が検出された。第2次調査は、平成18年度に市道建設に伴って南丹市教育委員会の調査によって実施された。古墳時代前期とされる溝や、古墳時代中期の竪穴式住居跡、平安時代～鎌倉時代の溝や土坑、柱穴等が確認された。平成20年



第2図 調査地位置図

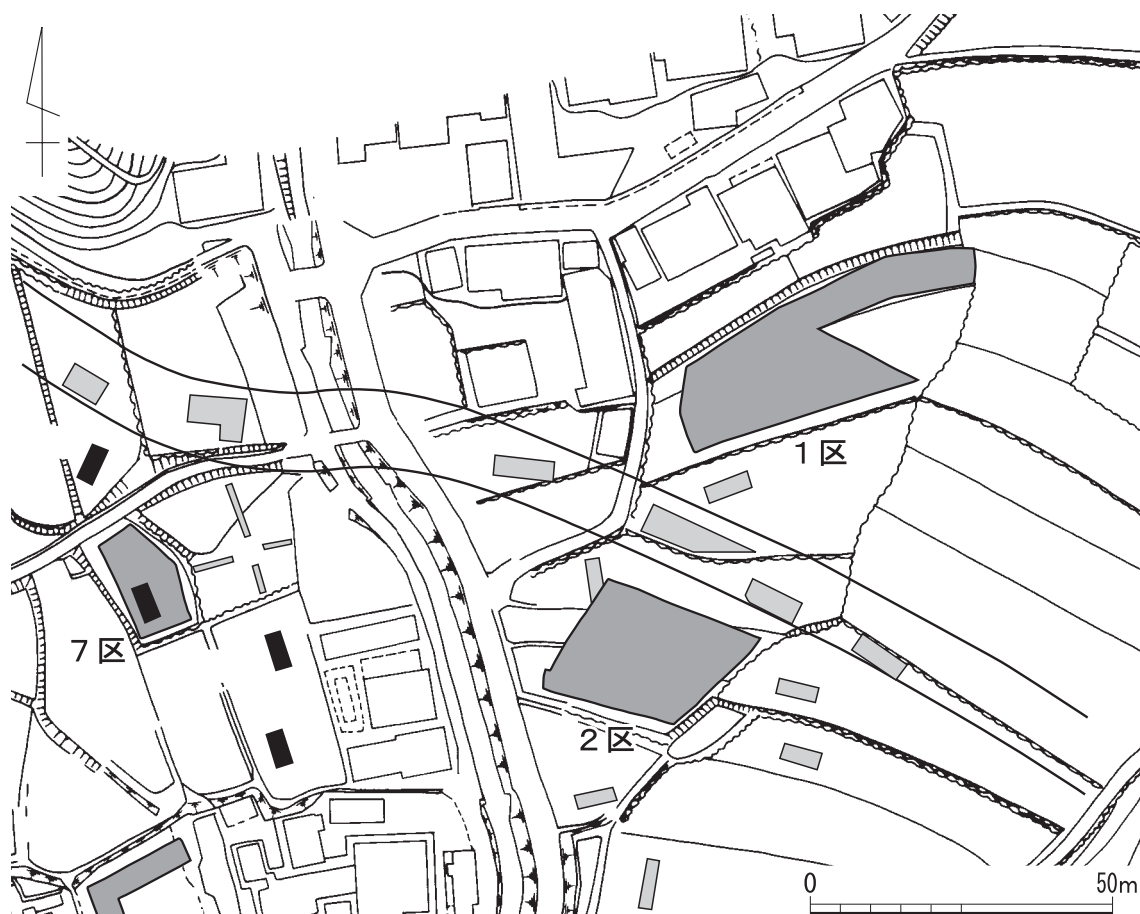
度の第3・4次調査は、東部事業地を南丹市教育委員会が担当し(第3次調査)、西部事業地を京都府教育委員会が担当して(第4次調査)実施されたものである。第3次調査の北半部では、奈良～平安時代後期の柱穴等が検出され、南半部では古墳時代の溝が検出された。また第4次調査でも、中世とされる柱穴群が確認されている。

今回報告する第5次調査は、第3次調査、第4次調査の成果を受けて、平成21年度事業として計画されたものである。現地調査は、平成21年5月18日～10月7日の期間をあて、2,000㎡の調査を実施した。発掘調査は、当調査研究センター調査第2課長肥後弘幸、調査第2課主幹第3係長事務取扱石井清司、同次席総括調査員田代弘、同調査員高野陽子が担当した。本報告書は、2章を田代と高野が、3章の石器を田代が執筆し、他を高野がまとめた。本報告に使用した座標は日本測地系(旧座標)による。調査に際しては、南丹市教育委員会、京都府教育委員会のほか、地元の方々から多くのご指導・ご協力を得た。記して感謝したい。<sup>(注1)</sup>なお、今回の調査にかかる経費は、全額京都府農林水産部が負担した。

## 2. 調査内容

### 1) 1区の調査(第4図)

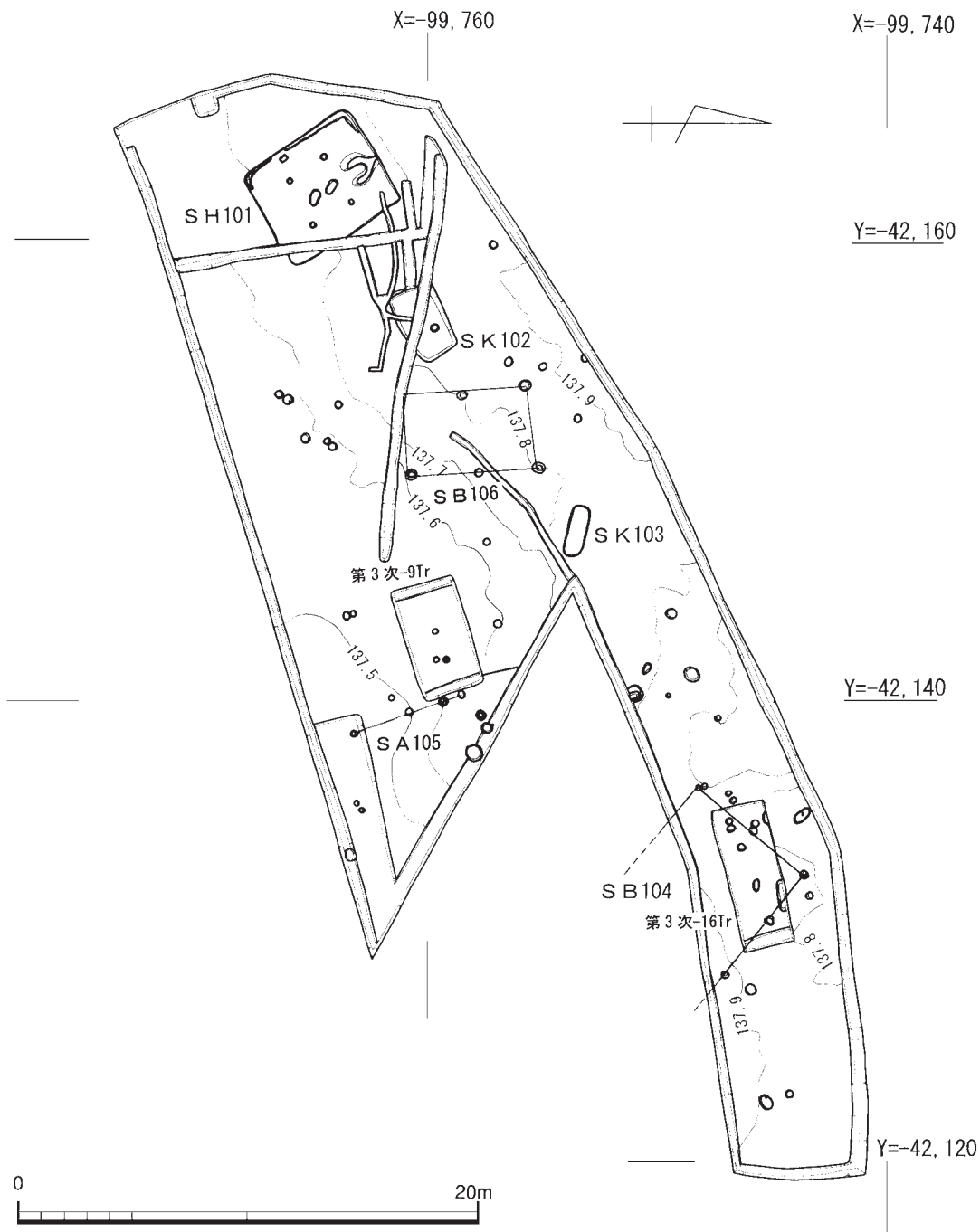
1区は、南丹市教育委員会の試掘成果(第3次調査9・16トレンチ)を受け、大谷口遺跡北東部



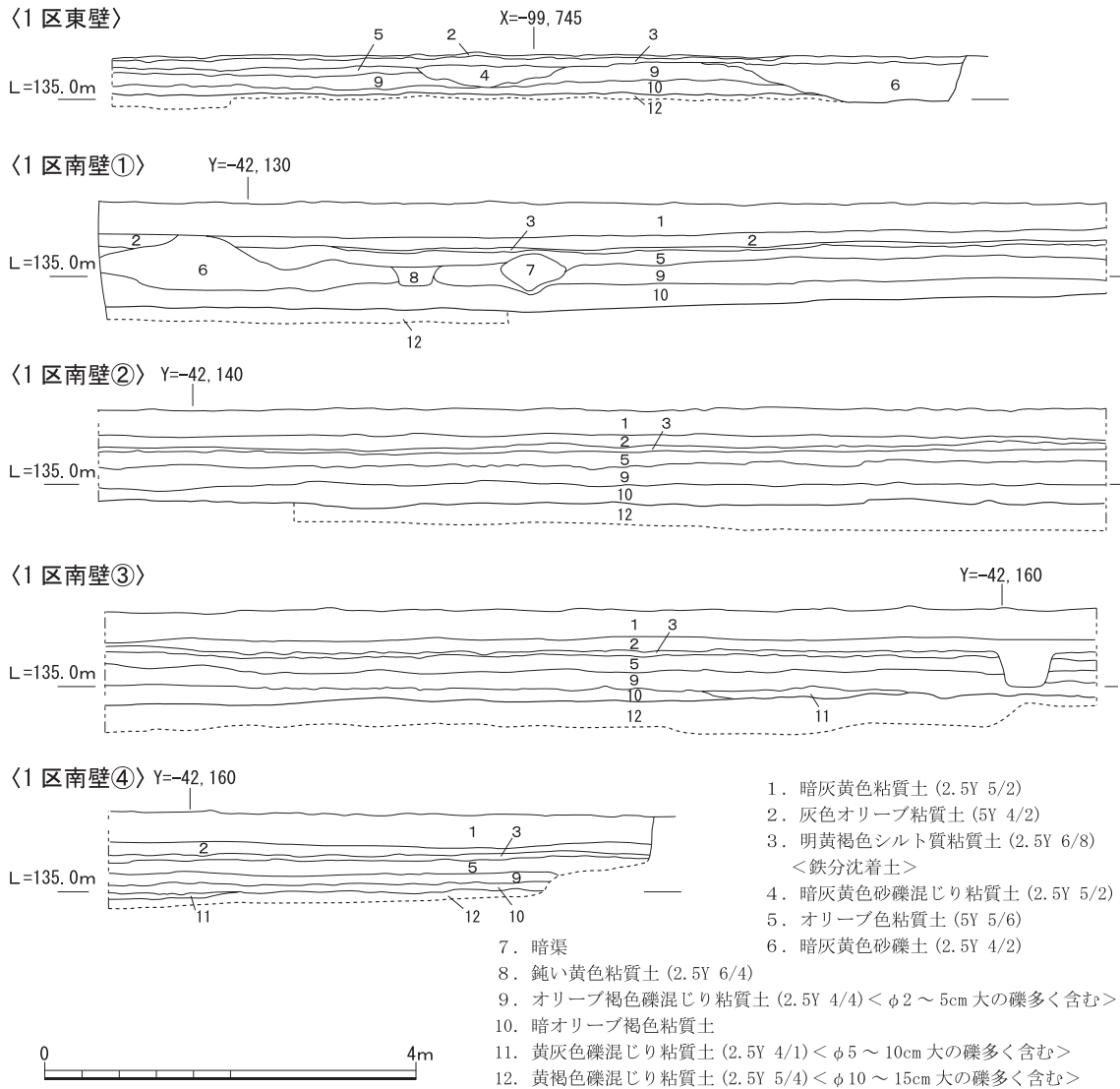
第3図 北部調査区配置図

に設定した。調査前は耕作地であり、旧地形は緩やかな傾斜地であったとみられる。耕作土および床土を重機により除去し、標高約137.8m前後で遺構面を確認した。調査面積は670㎡を測る。主な検出遺構は、弥生時代後期の土壌、古墳時代中期の竪穴式住居跡および平安時代と推定される掘立柱建物跡である。基準層位は、上層から耕作土・床土以下、オリーブ色粘質土、オリーブ褐色礫混じり粘質土、暗オリーブ褐色粘質土の順に堆積する(第5図)。

土壌 S K 102(第6図) 調査区西部で検出した方形土壌である。長さ3.4m、幅2.0m、深さ0.25mの規模をもつ。中央部を後世の暗渠によって大きく削平されている。埋土は、上層は小礫を多



第4図 1区平面図

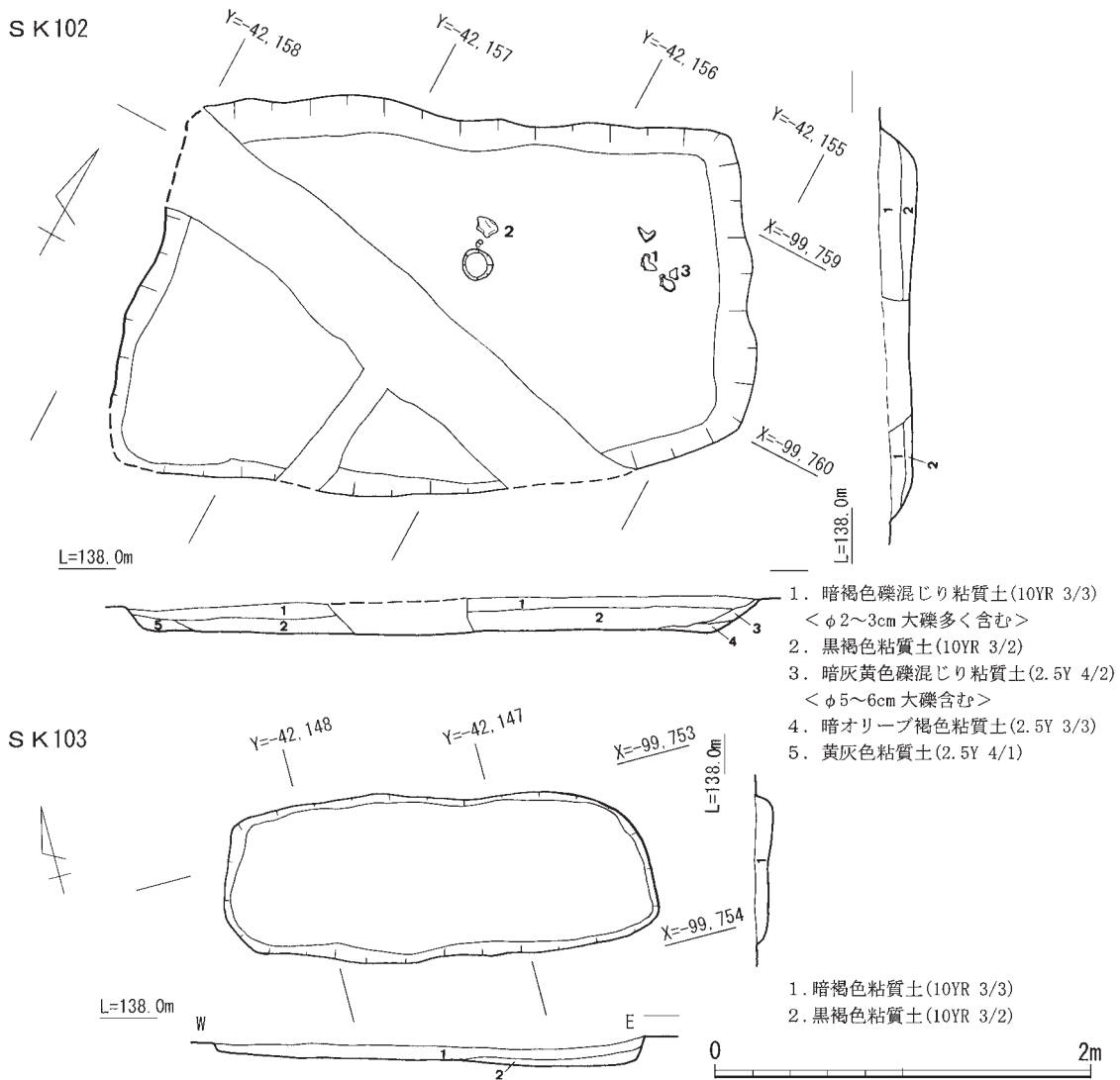


第5図 1区土層断面図

く含む暗褐色粘質土、下層は黒褐色粘質土である。出土遺物は、北東側床面と検出面から、弥生時代中期後半の土器片が出土した。掘形の形態から埋葬施設の可能性がある。

土壌 S K 103 (第6図) 調査区中央で検出した長方形の土坑である。規模は、長さ2.3m、幅0.9m、深さ0.15mを測る。上層は大きく削平されているが、掘形の形態から埋葬施設の可能性がある。遺物は出土していないが、S K 102に近接することから、同時期の土壌の可能性がある。

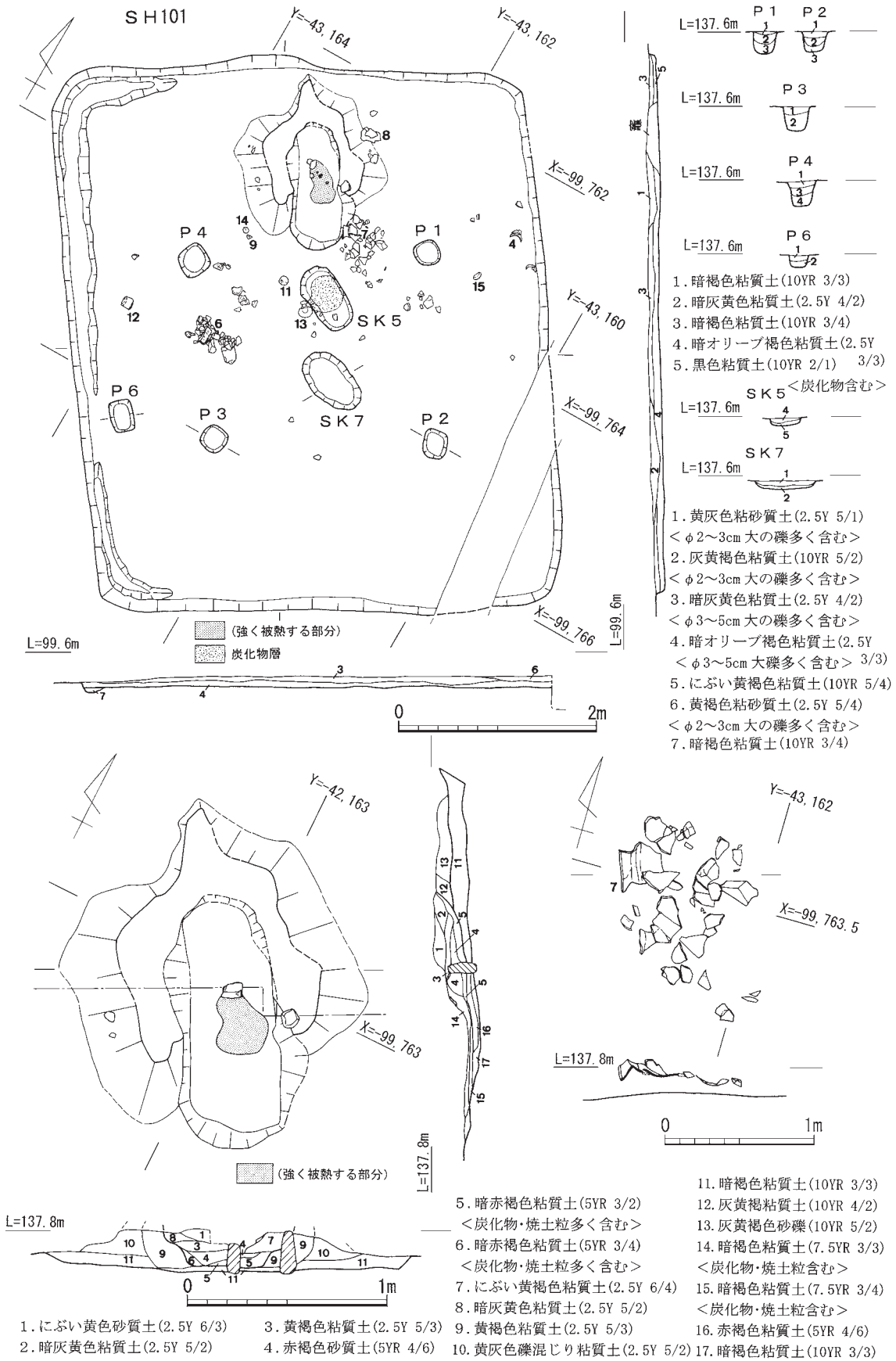
竪穴式住居跡 S H 101 (第7図) 調査区西端で検出した造り付け竈をもつ住居跡である。平面形は方形で、一辺約5.6m×4.8m、深さ0.2mを測る。支柱穴は4基で構成され、柱穴の深さは約0.2mを測る。造り付けの竈を住居の北西辺の壁体中央で検出した。馬蹄形の形状をなし、規模は長さ1.5m、幅1.4mを測る。竈中央南寄り支石を検出し、その前面に特に強い被熱部の広がりを確認した。また竈壁体の東側袖部で石材を検出した。約25cmの高さをもつ直方体の立石で、焚き口に配された石材とみられる。こうした事例は、南丹市周辺の古墳時代の造り付け竈に類例



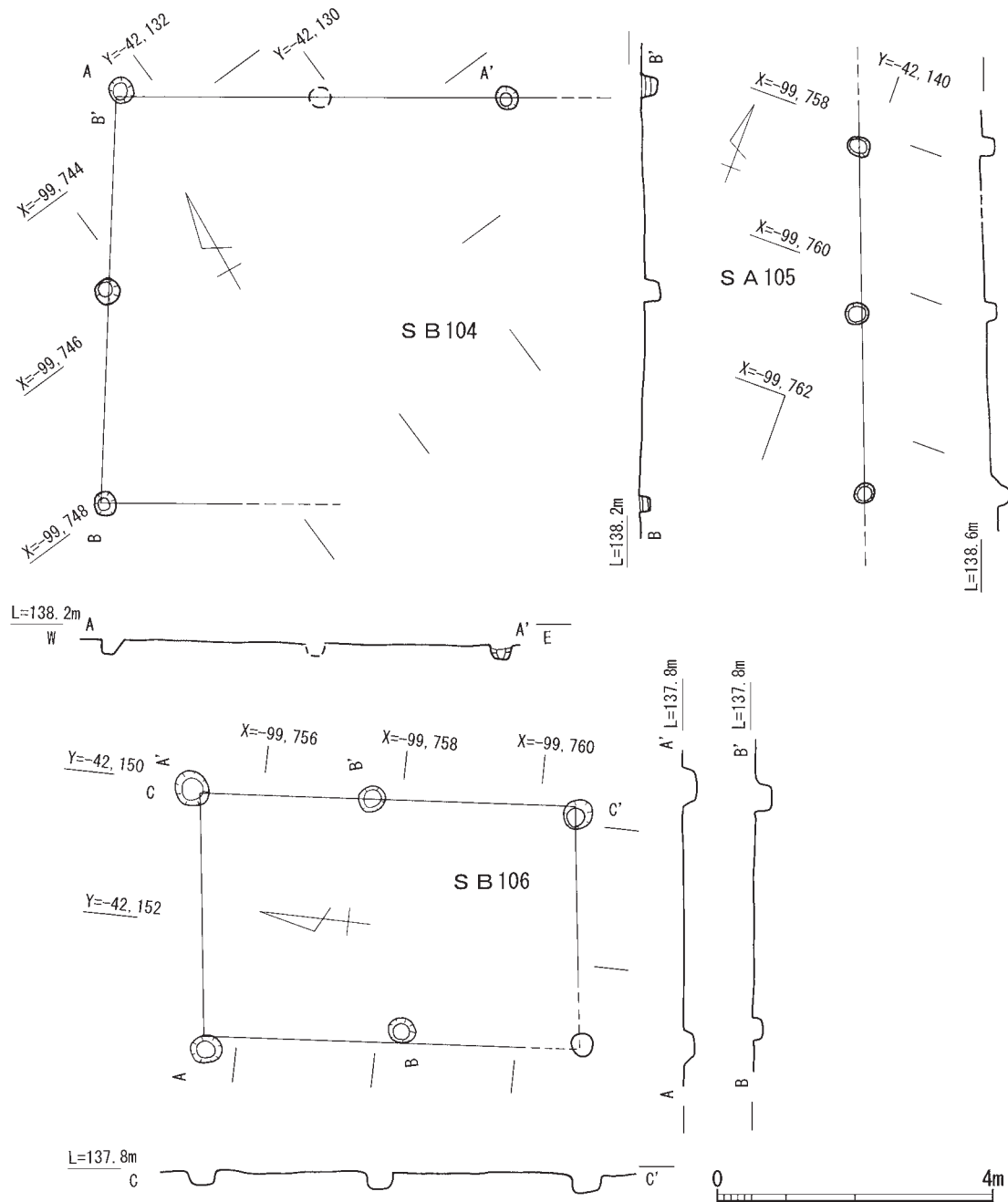
第6図 土壙SK102・103実測図

があり、地域的な特色をもつ。西側にはこれに対応する立石は確認できず、抜き取られた可能性がある。竈南側床面上で、焼土・炭化物を含む楕円形状の土坑SK5を検出した。長径0.7m×短径0.35mを測る。竈からの排土を一時的に溜めるための土坑であろう。また西側床面では、住居の壁体中央やや南寄り、壁体から約0.3m離れて、深さ約0.25mの方形の小柱穴(P6)を検出した。梯子などの住居の出入り口部の施設に伴う柱穴の可能性がある。北西と南西の住居壁体の内側に、幅約0.2m、深さ約5cmの周壁溝を部分的に検出した。埋土には5~10cm大の礫を多く含むが、床面は全体に良好な遺存状況にあり、多くの土器が出土した。竈前庭部東側で布留式甕1点が出土したほか、床面各所で土師器高杯・椀、須恵器杯蓋・杯蓋等が出土した。布留式甕は最終段階の資料であり、須恵器との同伴関係を知ることができる良好な資料である。出土した須恵器は、おおよそ陶邑窯TK216~208型式に該当し、時期は5世紀前葉~中頃と推定される。

掘立柱建物跡SB104(第8図) 調査区東部で検出した建物跡である。柱穴の一部は、すでに南丹市教育委員会による第3次調査で検出されていたものである。2間×2間以上の規模をもち、



第7図 竪穴式住居跡SH101実測図



第8図 掘立柱建物跡S B 104・106、柱列S A 105実測図

柱間は約2.8~3.1mを測る。主軸は、N39° Eを測る。柱穴から遺物は出土していないが、周辺精査中に出土した土器から、奈良時代後期~平安時代前期の建物跡の可能性はある。

**掘立柱建物跡S B 106** (第8図) 調査区中央北で検出した東西方向の主軸をもつ建物跡である。2間×1間以上の規模をもち、柱間は桁行が約2.7~2.9m、梁間は約3.5mを測る。主軸は、N5° Wを測る。柱穴から土器は出土していないが、周辺の野条遺跡などでみられるように、東西方向の主軸をもつことや、柱間の距離から、平安時代後期~鎌倉時代の建物跡の可能性はある。

**柱列S A 105** (第8図) 調査区南東で検出した柱列である。2間以上の規模をもち、柱穴から

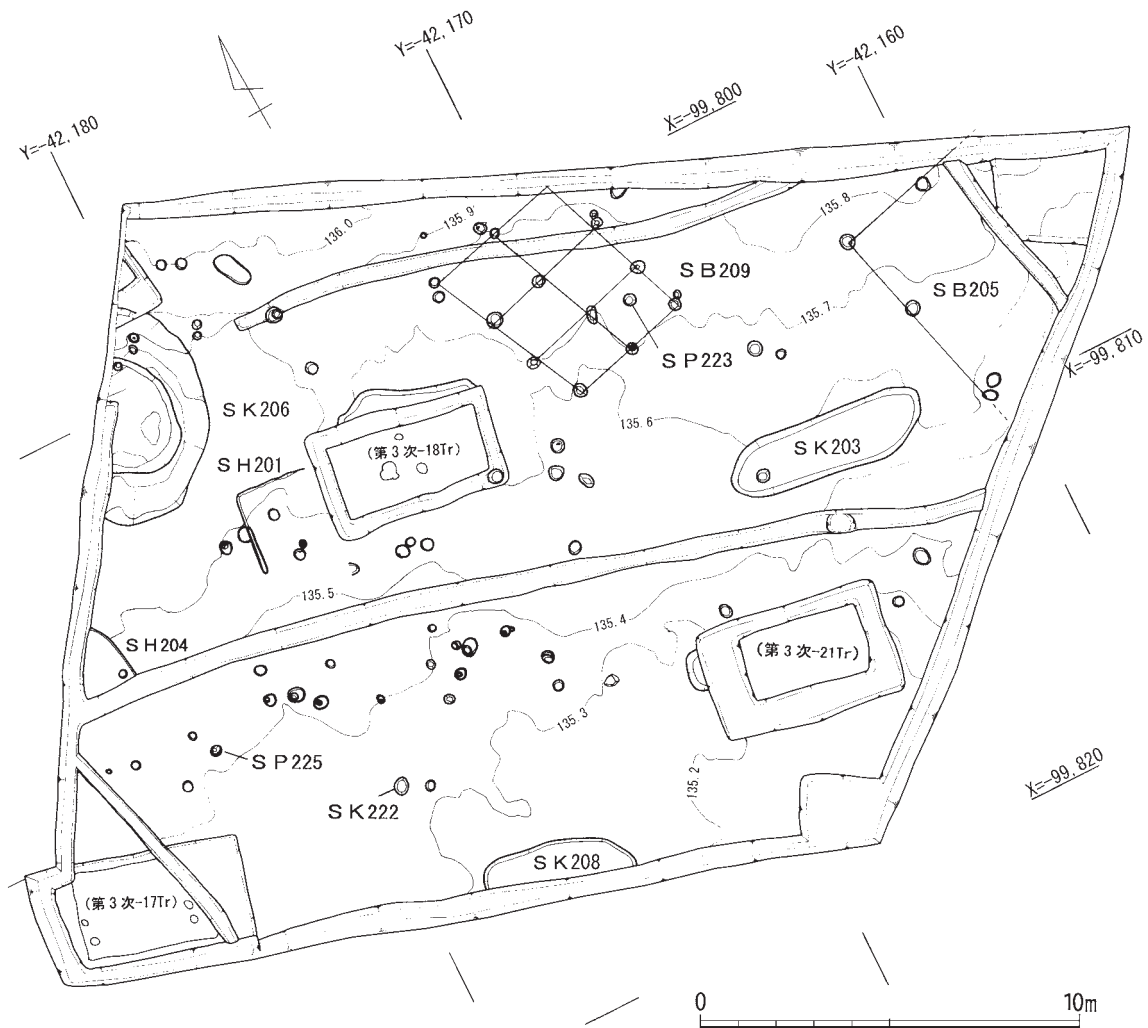


瓦器片が出土し、平安時代後期以降の柱列と推定される。

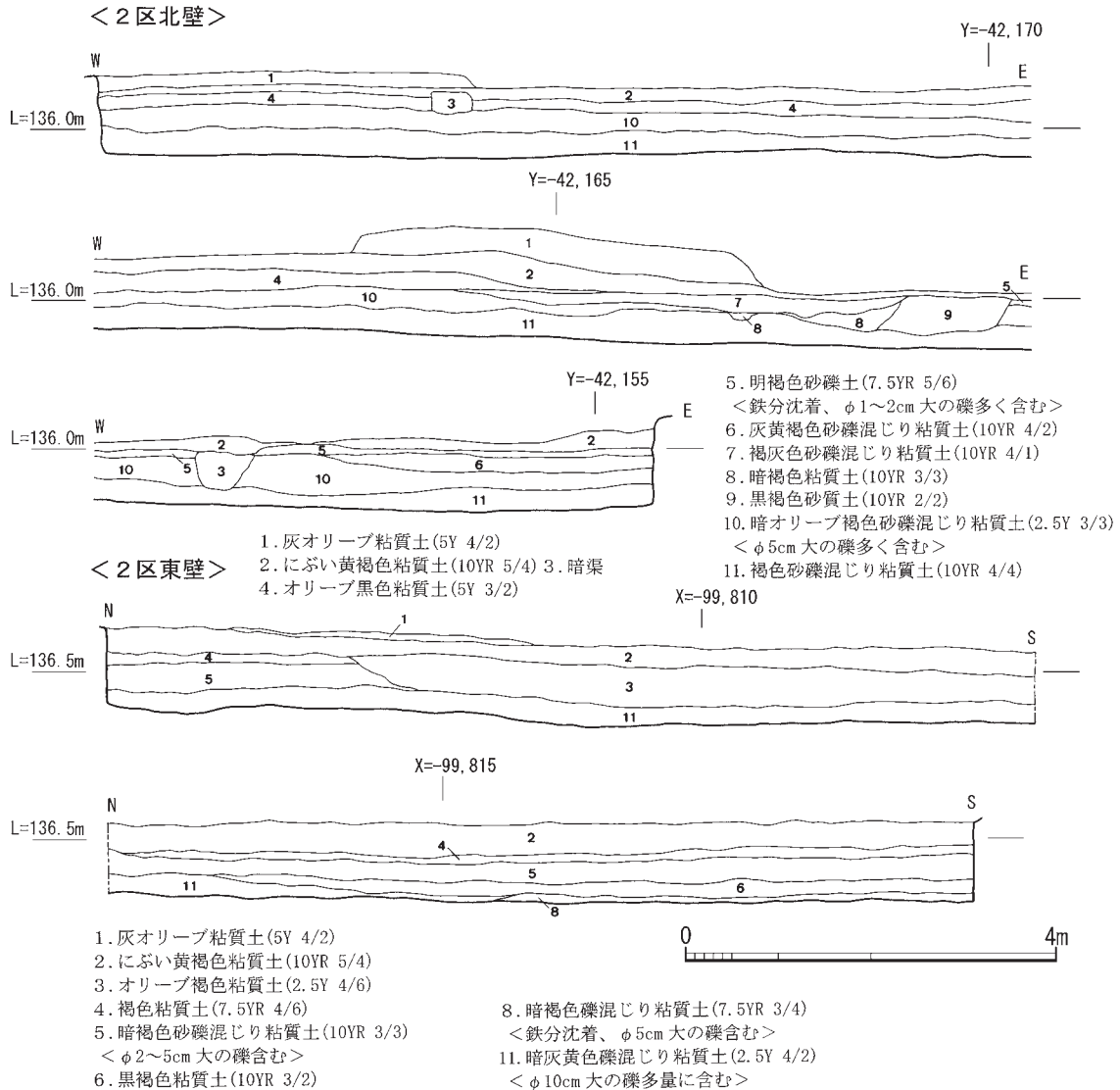
## 2) 2区の調査(第9図)

1区の南に設定した調査区である。調査前には、傾斜地の3筆の耕作地として利用されていたが、畦畔を除去して一つの調査区とした。南丹市教育委員会による試掘調査では、平安時代後期の柱穴が確認されている。遺構面は北部では標高約136.0m付近で、南部では約135.8m付近で確認した。層序は、耕作土以下に、近世遺物を包含するオリブ黒色粘質土層、中世遺物を包含する暗オリブ褐色砂礫混じり粘質土層が堆積する。調査面積は470㎡を測る。

土坑 S K 203(第11図) 調査区西部で検出した。不整円形を呈する落ち込み状の土坑である。規模は長さ約5.5m、幅1.6m、深さ0.15~0.2を測る。西部の埋土から、磨製石斧2点が出土した。2点のうち1点は、刃部の一部が剝離し、もう一点は刃部を折損していた。いずれも基部に敲打痕があり、工具として転用されたものである。他に出土遺物は認められない。2区は谷部の中央付近にあり、現在でも各所で湧水が多くみられることから、水場の周囲に形成された作業土坑であった可能性がある。出土石器から、おおよそ弥生時代中期後半の土坑とみられる。



第9図 2区平面図

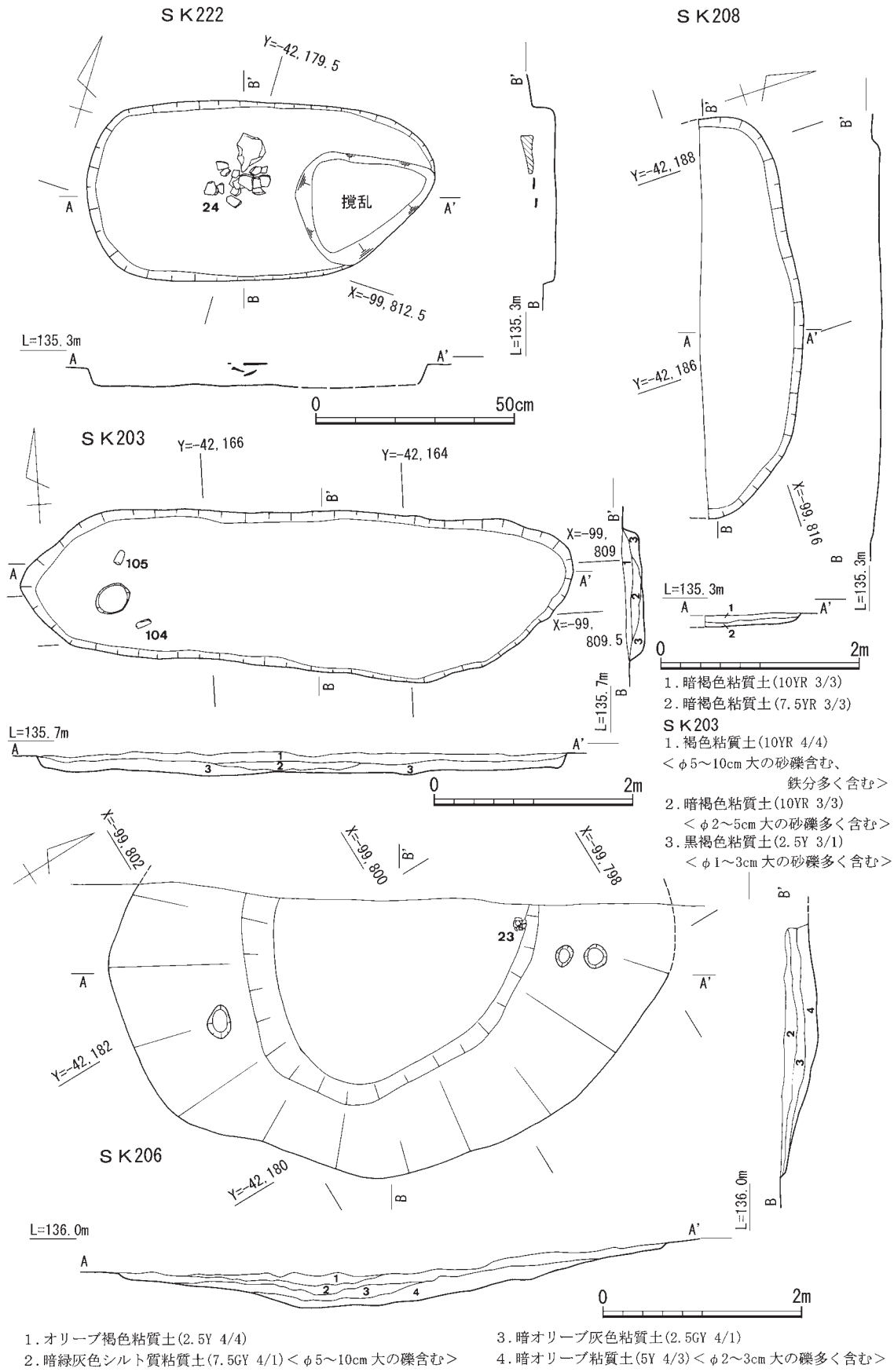


第10図 2区土層断面図

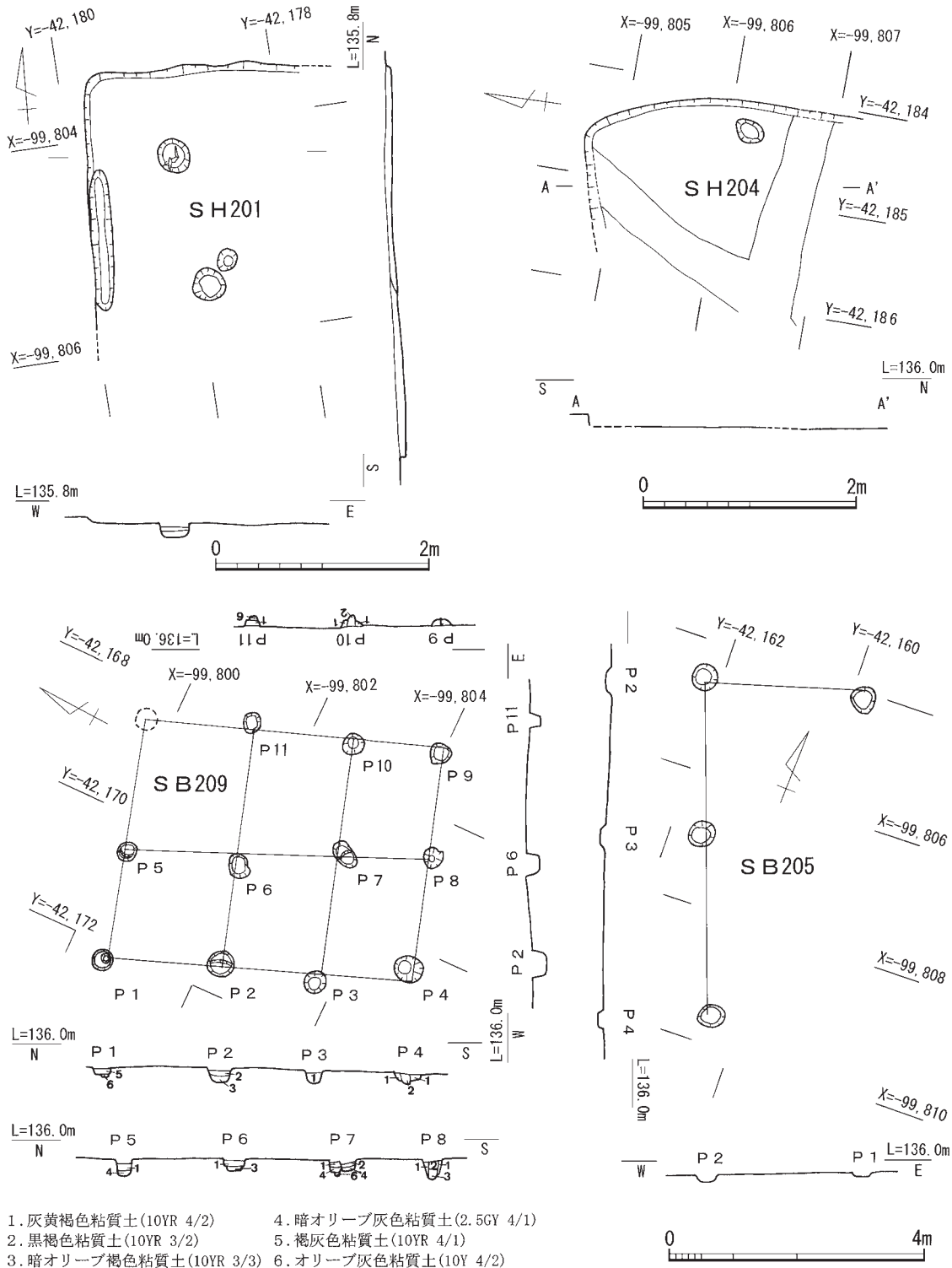
土坑 S K 208 (第11図) 調査区南端で一部を検出した不整形の土坑である。長さ約4.1m、幅1.1m、深さ0.15mを測る。埋土から弥生土器底部が出土し、時期は中期後半と推定される。

土坑 S K 222 (第11図) 南部で検出した楕円形状の小規模な土坑である。長径約0.85m、短径0.45m、深さ0.1mを測る。上層は大きく後世の削平を受けているが、弥生土器壺の一部が出土した。出土土器から、弥生時代前期末~中期初頭の土坑と推定される。

土坑 S K 206 (第11図) 調査区西端で部分的に検出した土坑である。平面形は円形をなすとみられる。全体に緩やかに落ち込む播鉢状の土坑である。規模は、長さ5.6m、幅2.9m、深さ約0.4mを測る。土坑中央西側の肩部から、弥生土器壺の底部が出土した。土器の直上まで、近世遺物包含層によって大きく削平をうけ、土器上部は遺存していないが、正置されていたとみられる。土坑の埋土には、暗褐色シルト層が堆積し、基底部分は湧水点に達している。湧水地点を利用したいわゆる水場遺構と推定され、土器は供献土器の可能性もある。土坑内西壁の暗渠により削平された部分にかかり、甕1点が出土している。時期は出土土器から弥生時代中期後半と推定される。



第11図 土坑S K 222、土坑S K 203・206・208実測図



第12図 竪穴式住居跡S H201・204、掘立柱建物跡S B205・209実測図

竪穴式住居跡S H201(第12図) 調査区中央で検出した建物跡である。床面南辺周辺は耕作によって大きく削平され、北西床面の一部のみを検出した。一辺の残存長約2.5mを測る。柱穴は西側で2基を検出し、4基から構成されるとみられる。床面から土師器甑、高杯の一部が出土し、古墳時代中期前半の住居跡と推定される。

竪穴式住居跡 S H 204 (第12図) 調査区西端で、住居の北東隅の一部を検出した。一辺の残存長1.8mを測る。柱穴は1基のみを確認した。土師器片が出土し、古墳時代の建物跡と推定される。

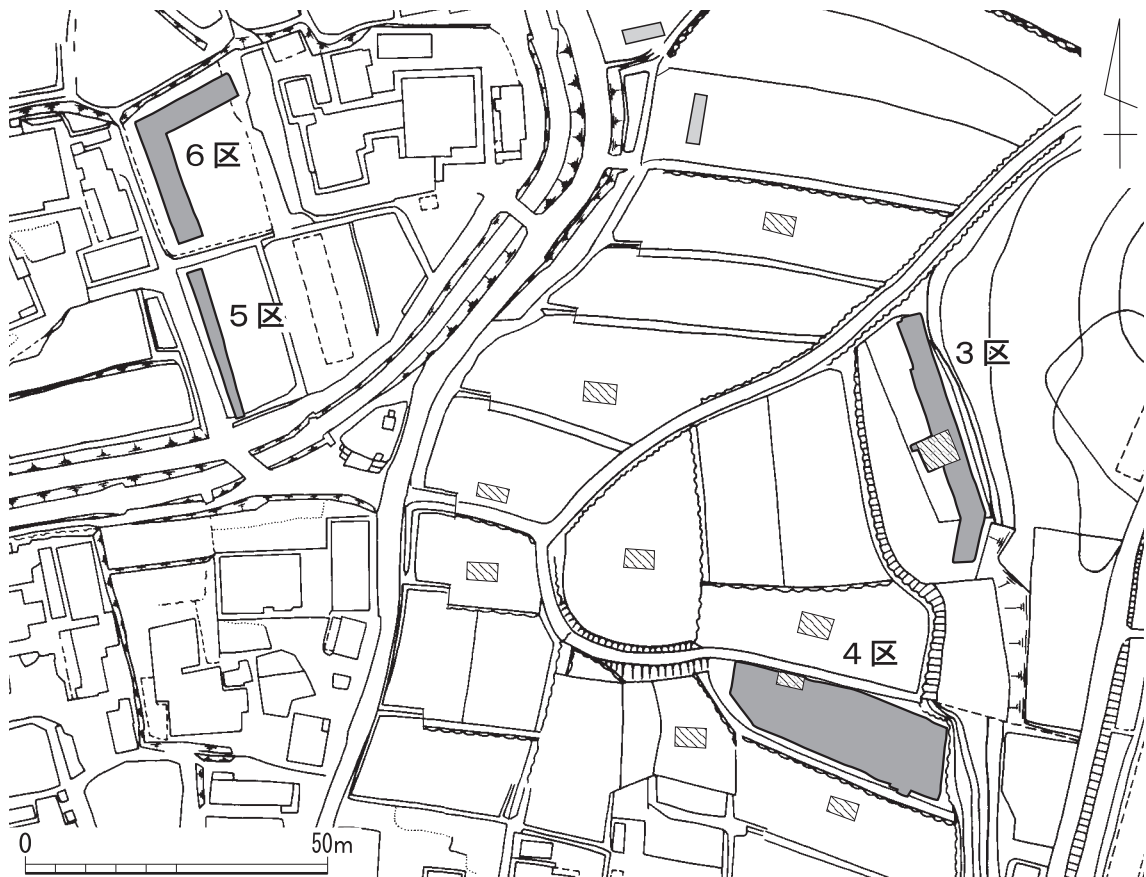
掘立柱建物跡 S B 205 (第12図) 調査区北東隅で一部を検出した。1間×2間以上の建物跡と推定される。柱間は2.5~2.7mを測り、柱穴内から須恵器片が出土した。類似した柱間をもつ建物跡は、野条遺跡でも検出されており、平安時代後期の建物跡と推定される。

掘立柱建物跡 S B 209 (第12図) 北部中央で検出した総柱の建物跡である。規模は、桁行3間(約4.7m)×梁間2間(約3.6m)を測る。柱間は約1.5~1.7mを測る。柱穴から遺物は出土せず、時期は明確にできないが、柱構造や埋土の状況から中世以降の建物跡と推定される。

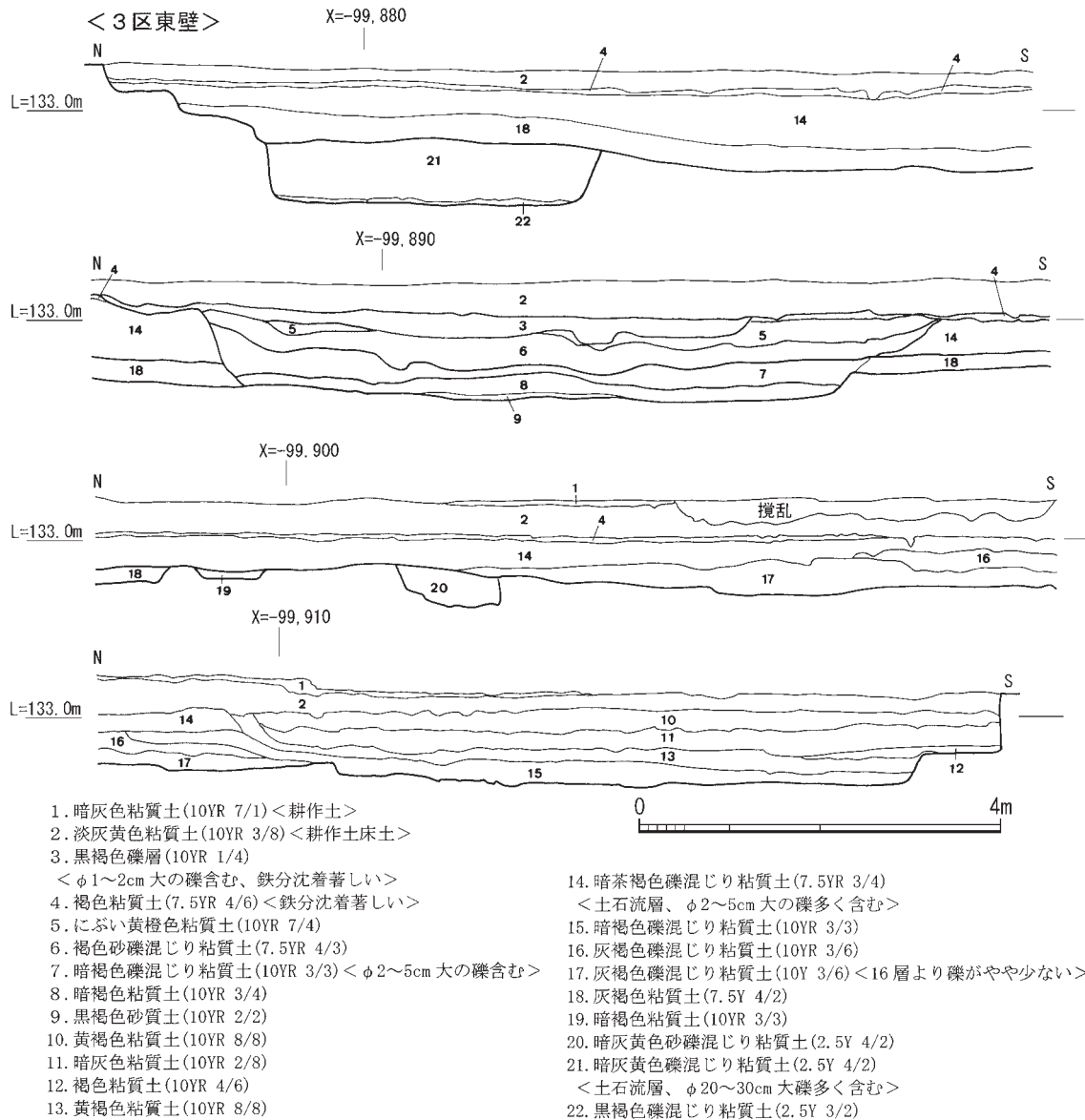
その他の柱穴 調査区北部の S B 209 周辺で検出した柱穴 P 223 から、弥生時代後期後葉とみられる土器片が出土した。また、南西部でも柱穴群が検出されたが、柱穴は浅く、耕作による削平が著しい。これらのうち柱穴 P 225 からは、平安~鎌倉時代の土師器皿片が出土し、建物跡を復原するには至らないものの、中世の建物跡が構築されていた可能性が高い。

### 3) 3区の調査(第13・15図)

3区は、遺跡東端の天井川となっている官山川の堤状の高まりに接して設定した調査区である。遺構面は北部では標高約133.0m付近で確認した。層序は、耕作土・床土以下に暗茶褐色粘質土・灰褐色粘質土層が堆積し、北部では132.6mで基盤層を確認した。弥生時代後期中葉の住居床面はこの基盤層に到達している。北端部で基盤層の断ち割り調査を行い、厚さ約1.2mの土石流(暗



第13図 南部調査区配置図



第14図 3区土層断面図

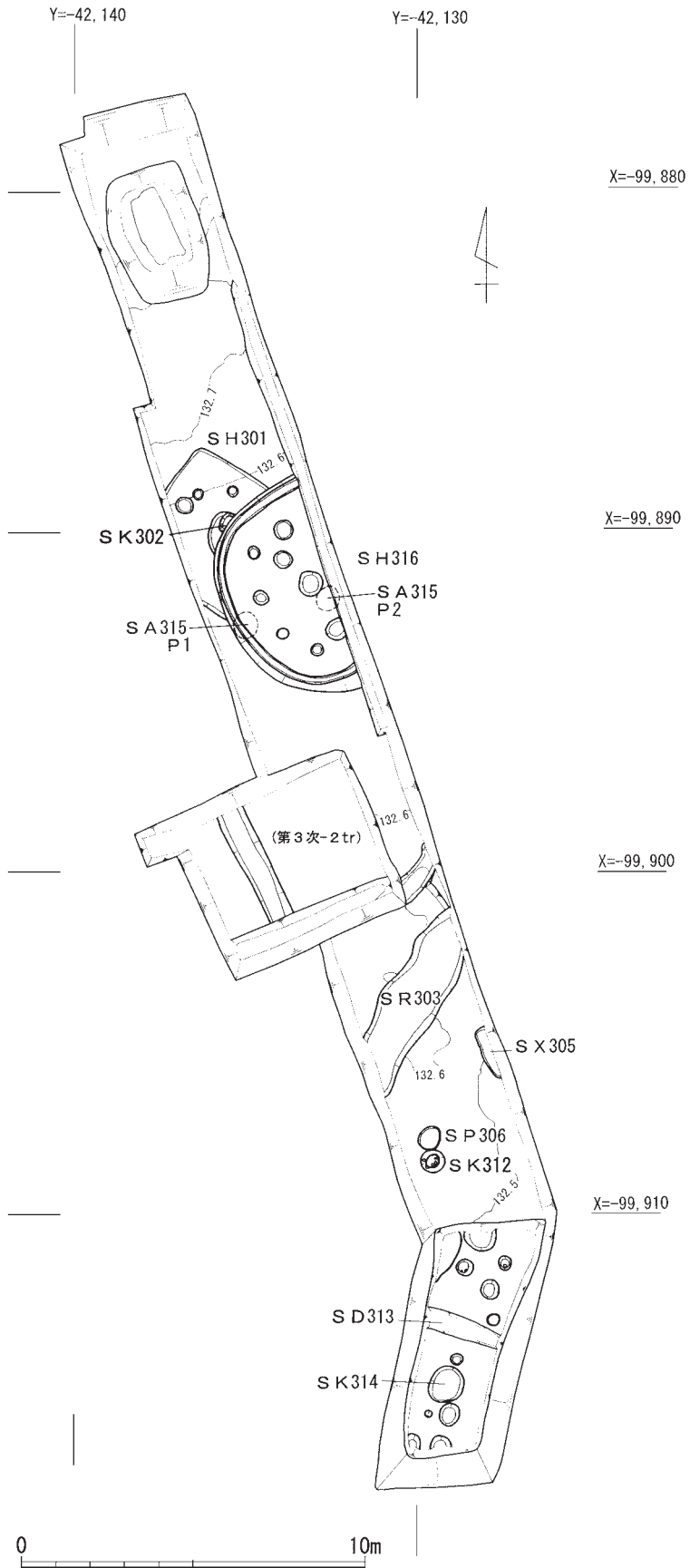
灰黄色礫混じり粘質土)の堆積層で形成されていることが判明した。さらにその下層の131.9m付近で、水平堆積層を確認した。縄文時代に形成された層位の可能性があるが、特に遺物等は出土していない。南丹市教育委員会による第3次調査の試掘区(2トレンチ)の一部を取り込み、調査区を設定した。調査面積は160㎡を測る。

竪穴式住居跡 S H316 (第16図) 調査区中央で検出した円形の竪穴式住居跡である。調査区東壁に切られる形で、遺構の約半分を検出した。古墳時代中期の住居(S H301)床面から約0.8m下層で床面を検出した。遺構の規模は、直径約6.4m、検出面からの深さ約0.3mである。南東側の壁体は、斜めに緩やかに立ち上がり、この方向に入口が形成された可能性がある。床面との境界に幅約0.2m、深さ約5cmの周壁溝をめぐるせている。住居床面中央にあたるには、東西長約0.7m、南北長約0.6m、深さ約0.3mの土坑(K1)が設けられていた。土坑の周囲に周縁帯となる土堤は確認できなかったが、土坑底と土坑周囲に炭灰が楕円形状に分布していたことから、

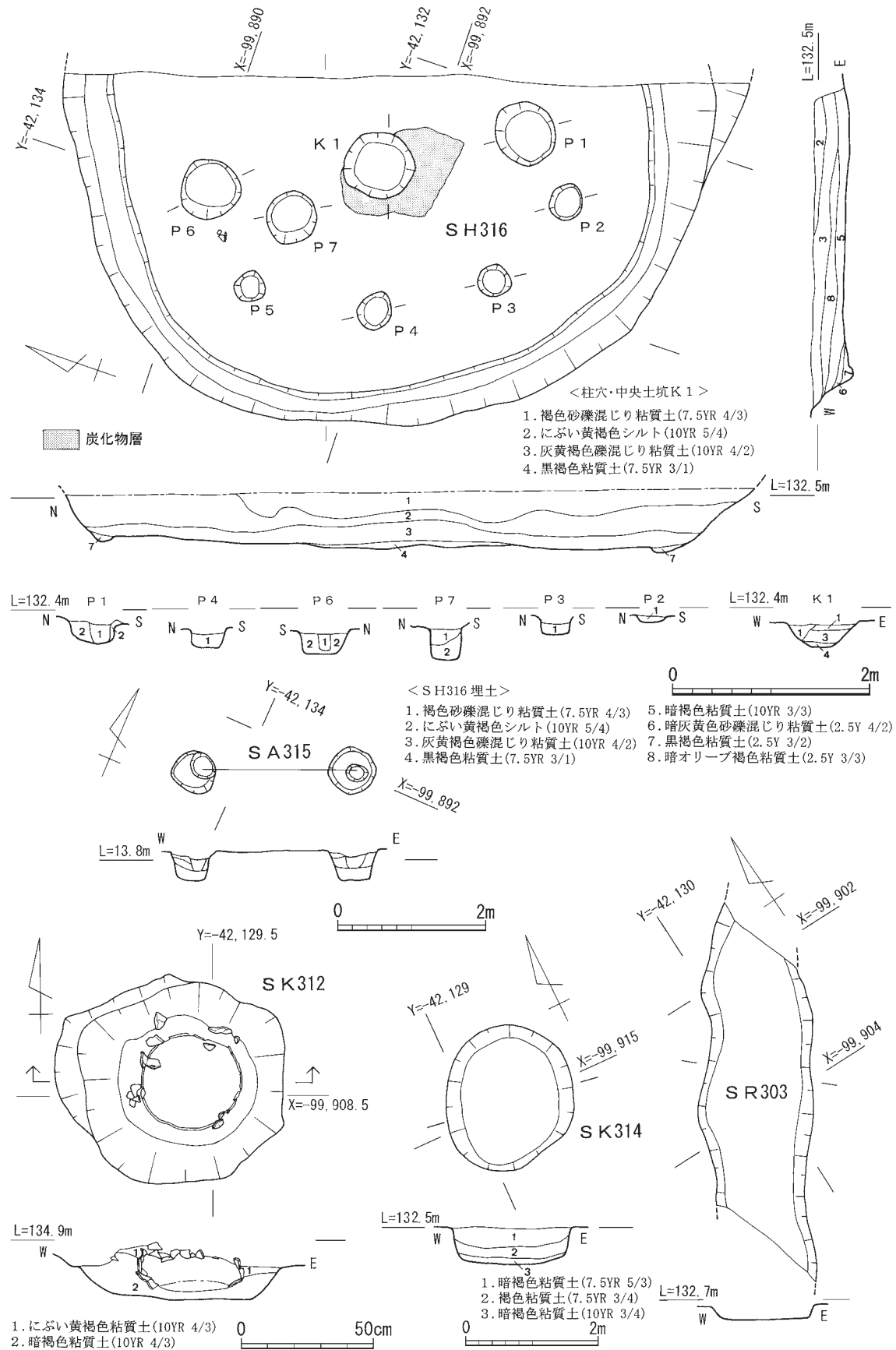
いわゆる灰穴炉とみられる。主柱は2基ないし4基から構成されると推定される。柱穴P1・P6から構成される場合には2主柱となり、P4を含めて構成される場合は、4主柱として復原できる。P1・P6は規模がやや大きく、直径約0.6m、深さ約0.45~0.6mを測る。このほか、床面では、5基の柱穴を検出しているが、このうちP2~P5は側柱に伴うものとみられ、垂木を受ける役割を担う柱として工夫されたと考えられる。

**柱列S A315(第16図)** 調査区中央で検出した2基の柱穴(P1・2)を柱列として復原したものである。柱間は約2.1m、柱穴の規模は径約0.6m、深さ0.4mを測る。埋土から弥生土器片が出土し、弥生時代後期後葉と推定される。

**土壙S K312(第16図)** 直径約0.75m、深さ約0.2mの円形土壙である。土壙の中央に、径約40cmの甕が体部下半を割られた状態で据えられていた。器体外面には、煤が付着していることから、一度火にかけたものを埋納したと考えられる。体部上半は、後世の削平により失われ、体部幅約10cm程度を輪状に残すのみで、土器の復元には至らなかった。土器棺墓の可能性が



第15図 3区平面図



第16図 竪穴式住居跡S H316、柱列S A315、土壇S K312、土坑S K314、流路S R303実測図



あり、時期は弥生時代中期後半と推定される。

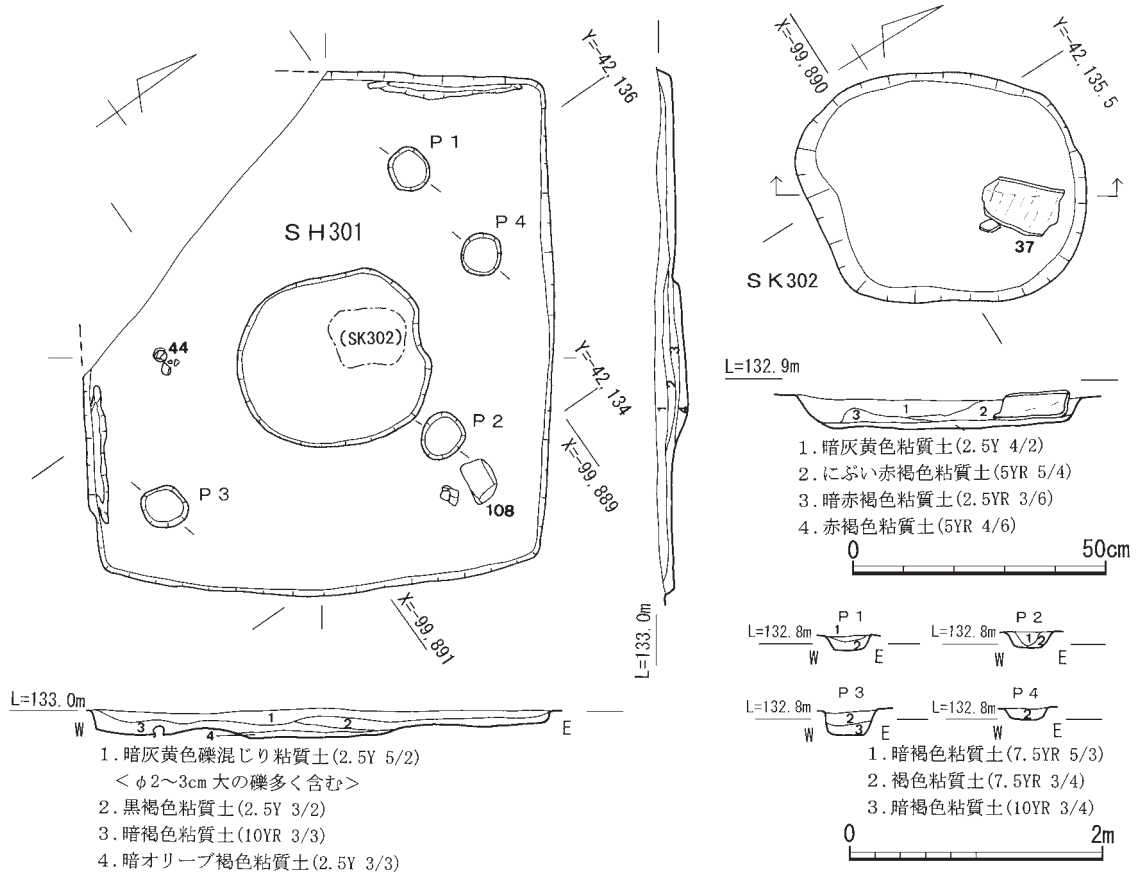
土坑 S K 314 (第16図) 調査区南端で検出した楕円形状の土坑である。長軸約2.1m、短軸約0.7m、深さ約0.55mを測り、断面形は逆台形状を呈する。弥生土器片が出土し、弥生時代中期の土坑と推定される。なお周辺で8基の柱穴ないしは小土坑を検出した。出土遺物は確認できないが、検出面と埋土の状況からおおよそ同時期の柱穴ないしは土坑と推定される。

土坑 S K 302 (第17図) 古墳時代中期の住居 S H 301と同一床面で検出した楕円形状の小土坑である。長径約0.6m、短径0.4mを測る、深さ0.1mを測る。炉跡とみられ、底部はにぶく赤変し、長頸壺の一部が出土した。周辺から弥生時代後期後葉の遺物が出土し、S H 301の構築時に、弥生時代後期の遺構を大きく削平していることが判明した。

溝 S D 313 幅0.5m、深さ0.15mの溝である。遺物は出土せず、時期は不明である。

流路 S R 303 (第16図) 東から西へ流れる流路跡である。検出長約4.5m、幅約1.8m、深さ約0.3mである。埋土は、黄褐色系の砂礫を主体とする。拳大の礫も多数みられる。粘質土はほとんど含まない。出土遺物はなく、自然流路跡とみられる。

竪穴式住居跡 S H 301 (第17図) 長方形の平面プランを持つ竪穴式住居跡である。調査区外に一部広がるが、住居跡の大半を検出することができた。住居跡の規模は、長(東)辺が4.2m、短(南)辺が3.7mである。検出面から床面までの深さは約0.2mである。床面には、周壁溝・土坑・焼土坑・柱穴などの遺構が認められた。周壁溝は、幅約0.2m、深さ5cmで一部を検出した。土坑は床面

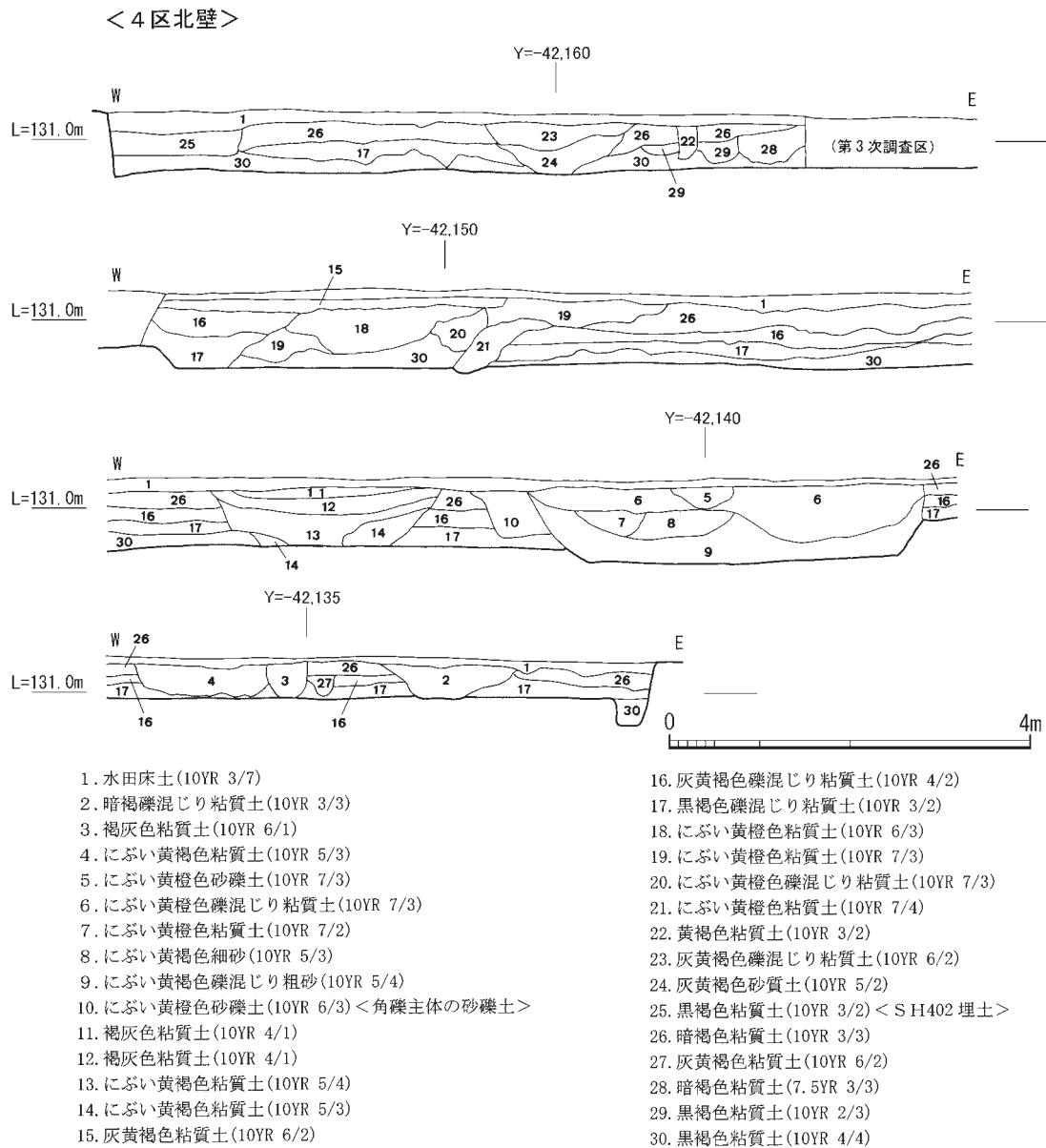


第17図 竪穴式住居跡 S H 301、土坑 S K 302実測図

のほぼ中央で検出した。長軸約1.8m、短軸約1.4mの長楕円形で、深さは0.1~0.2mである。この土坑は、床面精査の段階では明確に検出できず、床面を一部除去した段階で検出している。支柱穴は4基から構成されるとみられるが、柱の配置は非対称で、柱間も一律ではない。柱穴の規模は直径30~35cm、深さ約20cmである。床面からは小形丸底土器、甕などの土器類のほか、台石とみられる石製品が出土した。上面には使用痕とみられる磨滅痕跡があり、板石の主軸を住居中央に向け、住居床面の東隅にしっかりと据えられており、作業台あるいは調理台とみることができる。出土土器から、時期は古墳時代中期初頭と推定される。

4) 4区の調査(第19図)

4区は、遺跡中央部の3区南側に設定した調査区である。対象地は緩やかな傾斜地を1筆の耕作地として利用されていた地点で、北側により大きく上層が削平されている。遺構面は、東半で

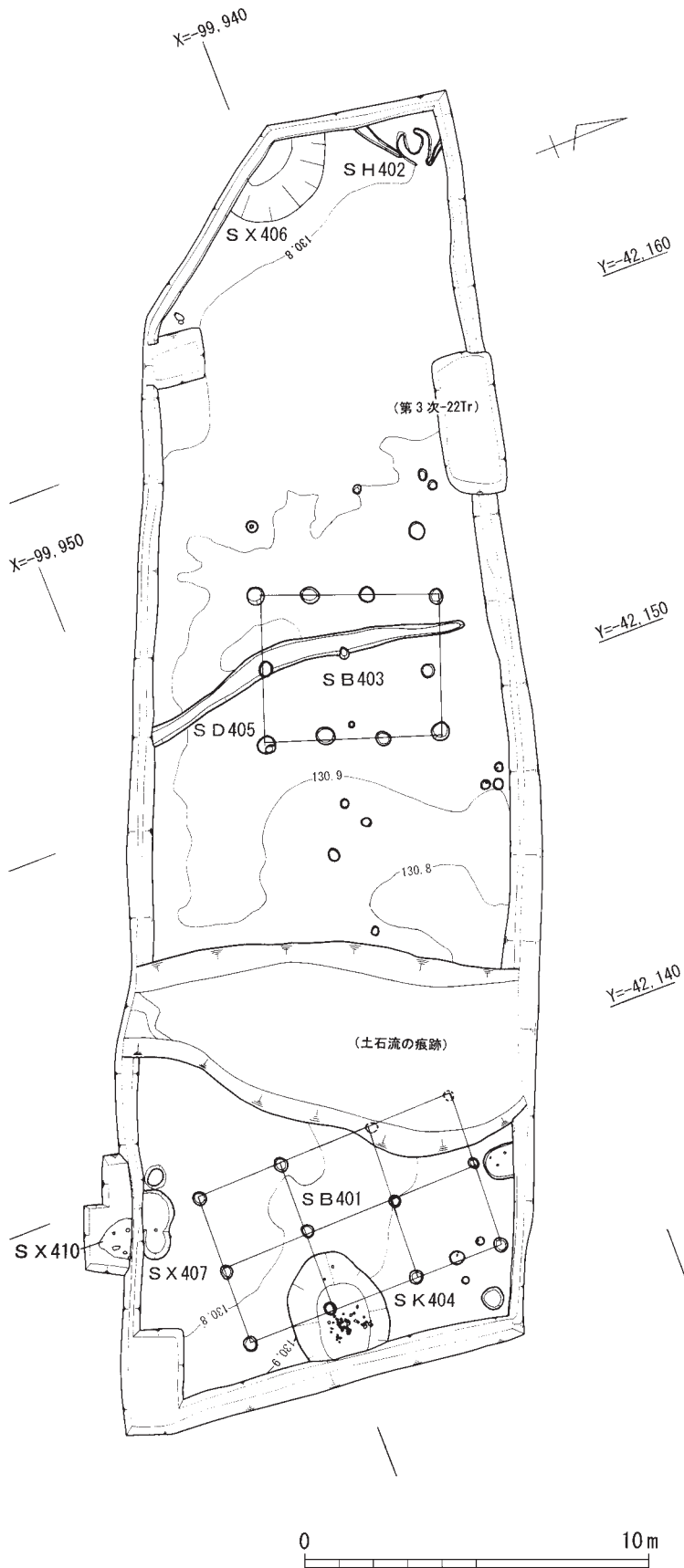


第18図 4区土層断面図

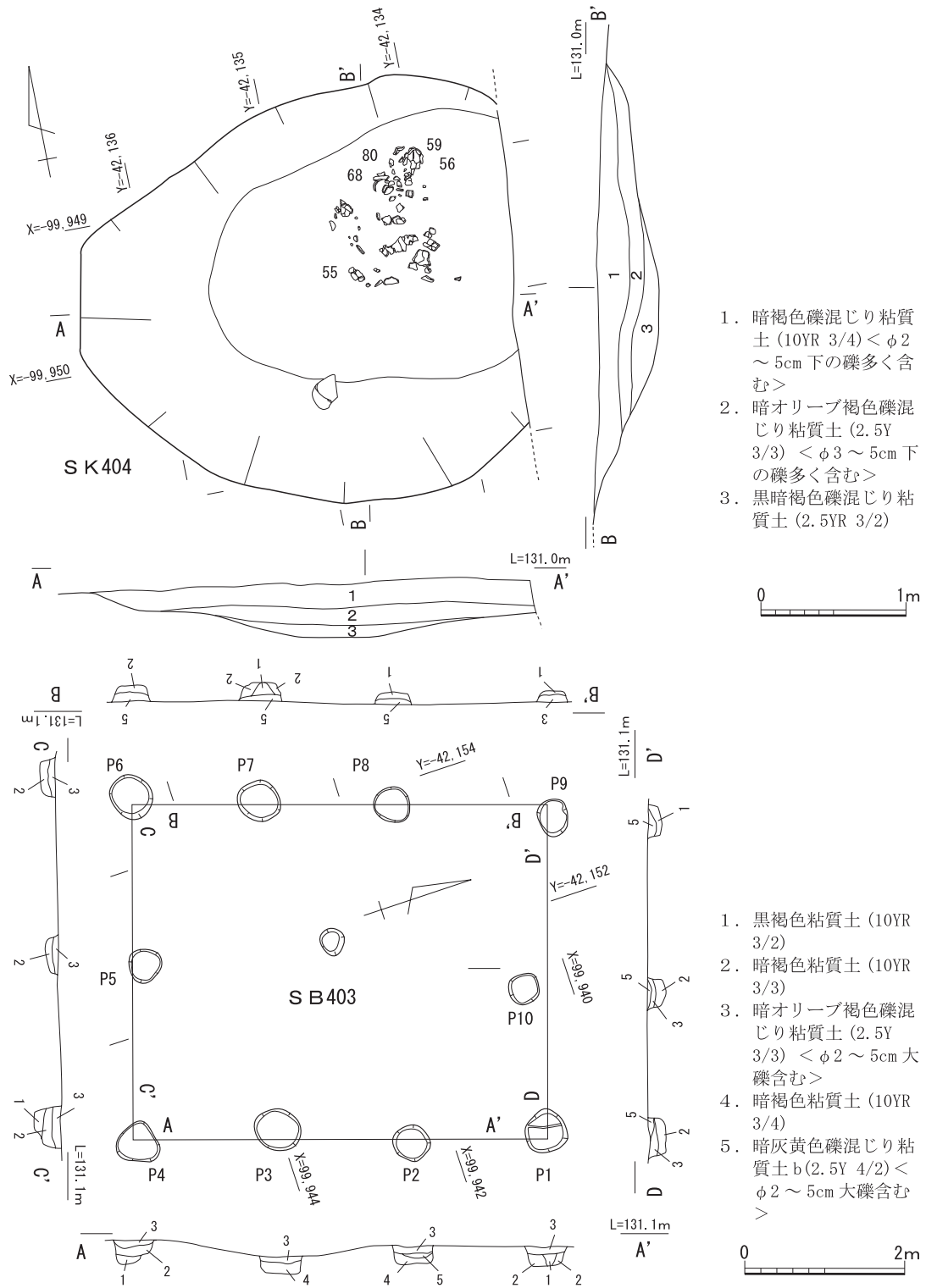
2面を確認し、平安時代の遺構面を標高131.1m地点で検出し、その約20～30cm下層で、飛鳥時代およびそれ以前の遺構面を同一面で検出した。また、調査区東部において、南北方向に流れた土石流の痕跡を幅2.5～6m、長さ12mにわたって確認した。江戸時代以降とみられる堆積層を削平して流路を形成しているが、正確な時期は不明である。層序は、耕作土・床土以下に、暗褐色砂礫混じり粘質土、褐色砂礫混じり粘質土の順に堆積する。調査面積は350㎡を測る。

土坑 S K 404 (第20図) 調査区東端で検出した楕円形の土器溜まり状の土坑である。長径は残存長3.0m、短径2.9mを測る。緩やかに落ち込み、播鉢状を呈する。検出面からの深さは0.4mを測る。出土遺物は、砂礫に混じり、整理箱約3箱の弥生土器が出土した。出土した土器には弥生時代中期後葉～後期と時期幅があるが、主体となる土器は、弥生時代後期後葉に属し、これらはあまり摩耗を受けていない。弥生時代後期後葉に、周辺の中期土器の堆積層を削平して、形成された土坑とみられる。

掘立柱建物跡 S B 403 (第20図) 調査区中央で検出した桁行3間(約5.6m)、梁間2間(約

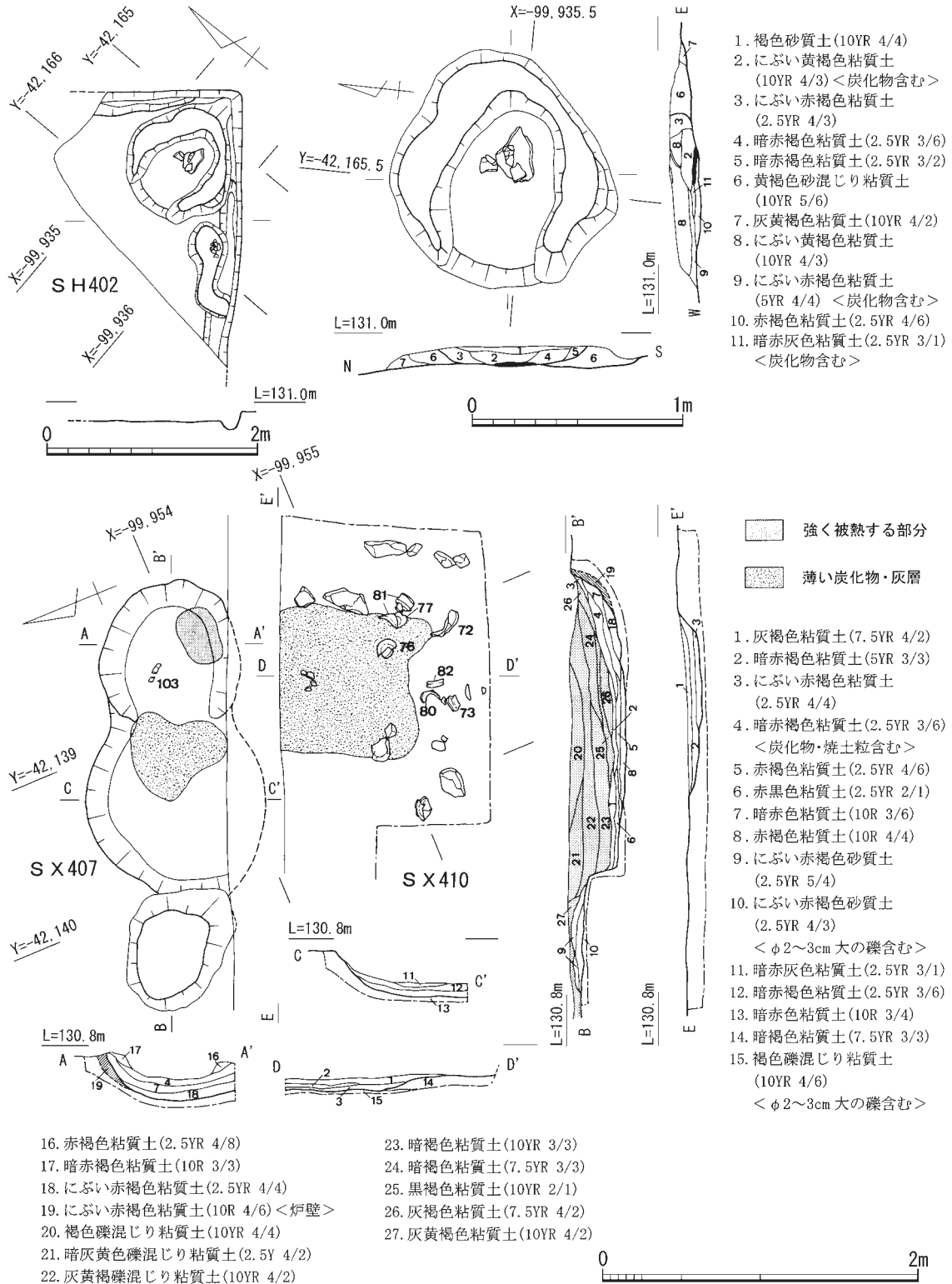


第19図 4区平面図



第20図 土坑SK404、掘立柱建物跡SB403実測図

4.8m)の規模をもつ建物跡である。柱間は、桁行約0.8~0.9m、梁間約1.0mを測る。梁間中央の柱穴は、規模も径0.4mと小さく、柱列からやや内寄りに入る位置に構築されている。柱穴から、杯部外面に刺穴痕がある布留式期の土師器高杯が出土し、古墳時代中期前半の建物跡と推定される。



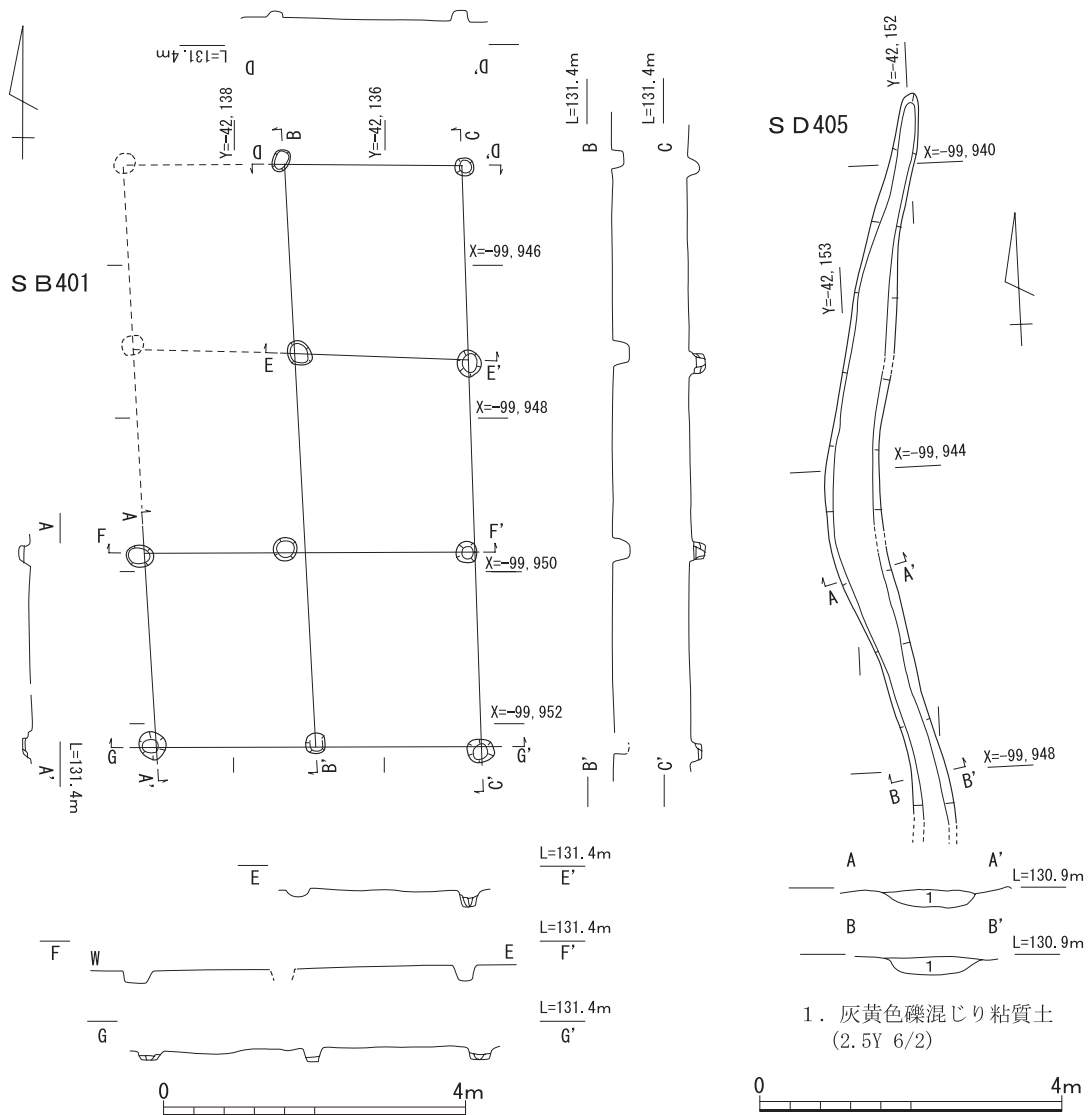
第21図 竪穴式住居跡SH402、炉跡SX407、落ち込みSX410実測図

竪穴式住居跡SH402(第21図) 調査区北西隅で確認した建物跡である。住居の南東床面を部分的に検出した。南東辺の残存長1.4m、深さ約0.1mを測る。南東隅に造り付け竈をもつ住居跡である。竈は、馬蹄形を呈し、両袖部が良好に遺存していた。竈中央から甕の一部が出土し、基底部中央で、支石として用いられたとみられる粘板岩を検出した。また、南西壁に沿って、土器

片が混じる被熱した黄褐色粘質土を検出したが、竈とは接続せず、住居内の煙道に関わるものとみることは困難である。出土遺物から古墳時代中期前半の建物跡と推定される。

落ち込み S X 406 (第19図) 調査区西端で検出した不整形の落ち込みである。長さ約4m、幅2.5m、深さ約0.15mを測る。布留式土器片が出土し、時期は古墳時代中期前半とみられる。

炉跡 S X 407・落ち込み S X 410 (第21図) 南壁の一部を拡張し、調査区南東で検出した。馬蹄形の炉本体(S X 407)に、円形土坑(S X 410)が接続し、さらに西側に堅く締まる粘質土層を塊状に検出した。炉本体の規模は、長さ約0.9m、幅0.9m、深さは西側基底部で約0.3mを測る。炉の基底は西側の円形土坑に向け、緩やかに傾斜する。接続する円形土坑は、やや大きく掘削され、径1.0mを測り、炉跡本体の基底部とほぼ同じレベルで掘削されている。炉の埋土には、炭化物・焼土粒を含み、断ち割り調査で、炉壁とみられる赤変した基底部を確認した。また円形土坑にも炉からの排土とみられる炭化物が薄く堆積する。出土遺物は、炉内から、鉄鎌1点と、刀装具の



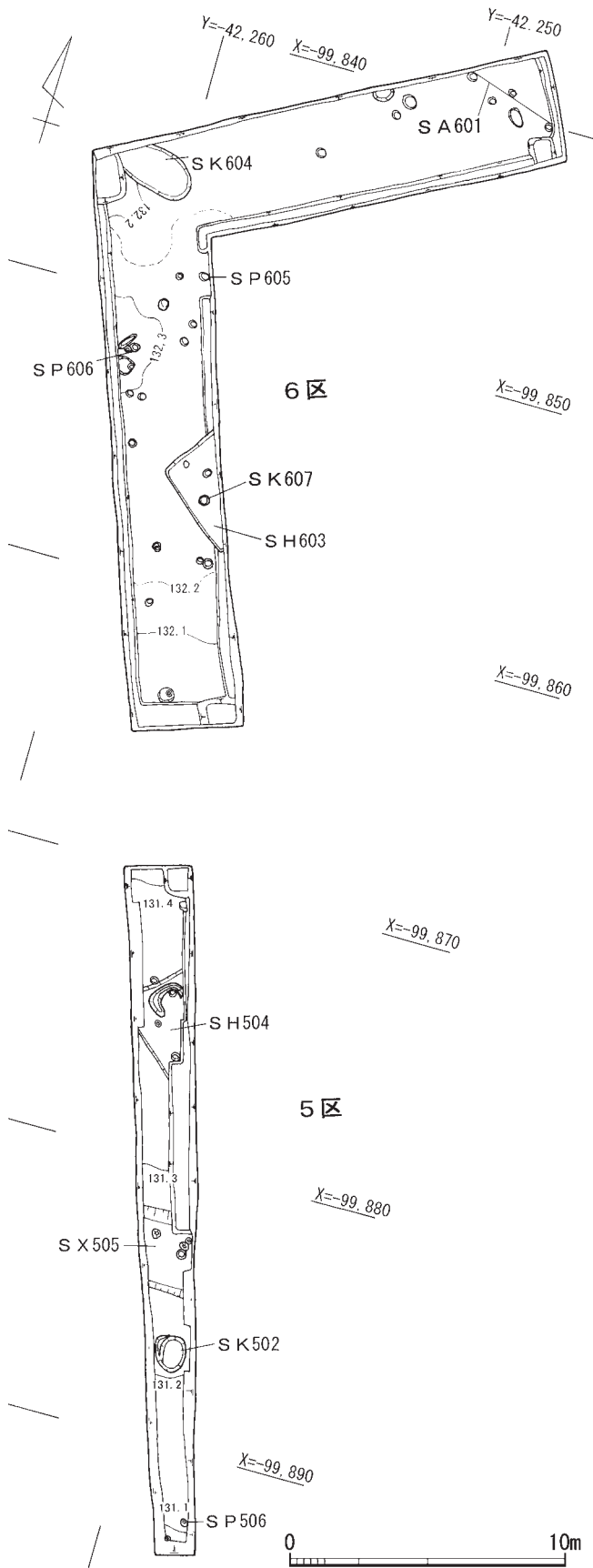
第22図 掘立柱建物跡 S H 401、溝 S D 405実測図

可能性がある微細な鉄小片1点が出土した。製鉄炉の可能性を想定して調査を進め、炉内および周辺の掘削土を洗浄したが、鋼滓や鍛造剥片等は出土しなかった。炉跡周辺では、柱穴を検出していないが、耕作地畦畔の段差面となっているため、上層は大きく削平されている。本来は簡易な上屋をもつ屋外炉として構築されたものであろう。また、丘陵の下方となる炉跡南側には、炉本体と円形土坑の接続部に向けて接続する幅約0.9m、深さ0.1mの浅い断面「U」字形の溝状の落ち込みS X 410を検出した。この周辺で炭化物の広がりがみられ、須恵器・土師器などの土器が出土した。S X 410は丘陵下方への排水の機能をもつ炉の付属施設とみられる。出土した土器は、おおよそ陶邑窯T K 217型式に属し、7世紀前葉に形成された遺構とみられる。

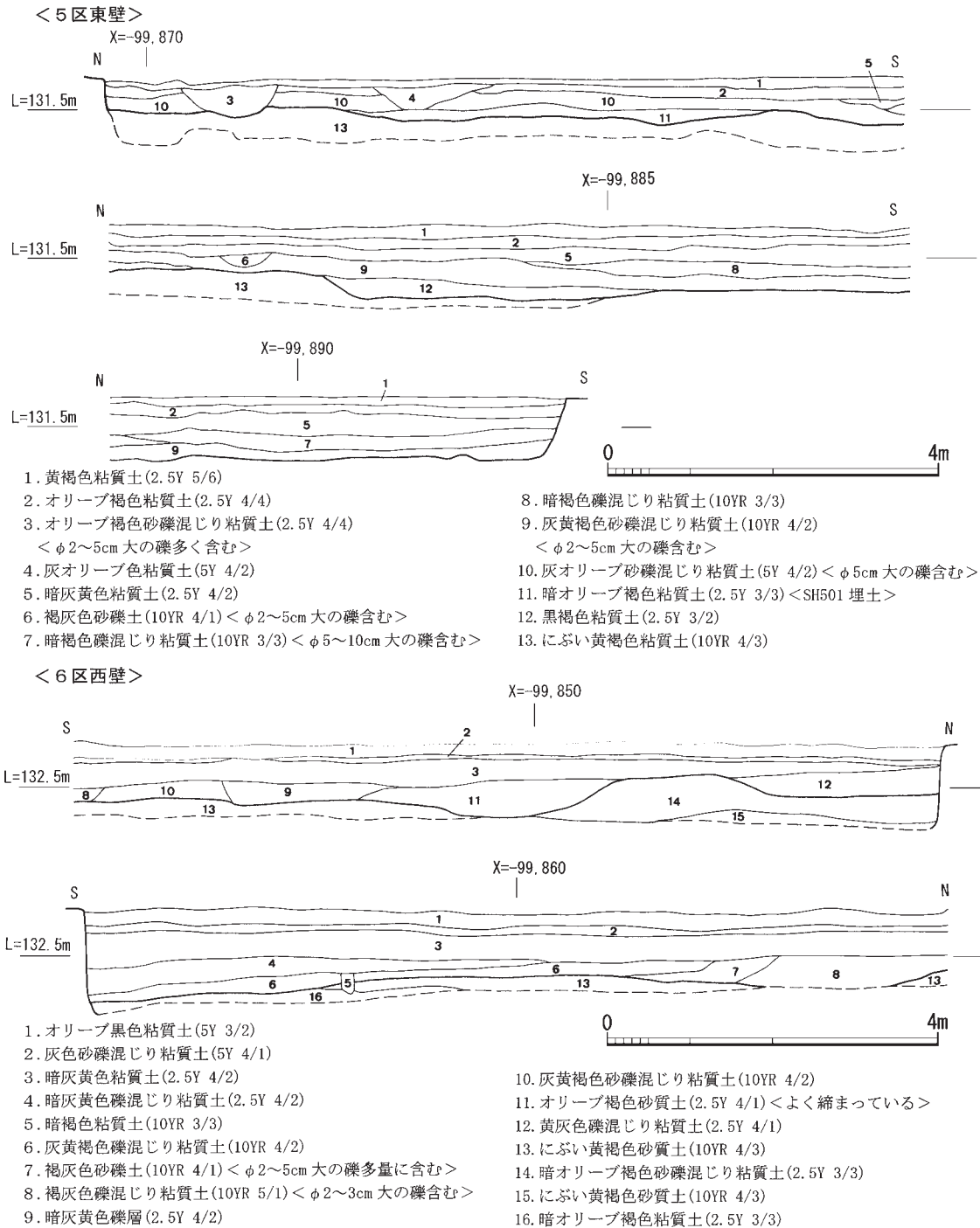
**掘立柱建物跡S B 401 (第22図)** 調査区西端で検出した建物跡である。桁行3間(約7.9m)、梁間2間(約4.8m)以上の規模をもつ。耕作土の直下で検出した遺構である。埋土には、土師器片を含むが、時期を明確にできる資料ではない。柱構造・柱間距離は、野条遺跡で検出された掘立柱建物に近く、また正方位をもつことから、平安時代後期の建物跡と推定される。

**溝S D 405 (第22図)** 調査区中央で10mにわたって検出した溝である。幅約0.5m、深さ約0.2mを測る。埋土は灰黄色砂礫混じり粘質土からなり、中世後期以降の溝と推定される。

5) 5・6区の調査(第23図)



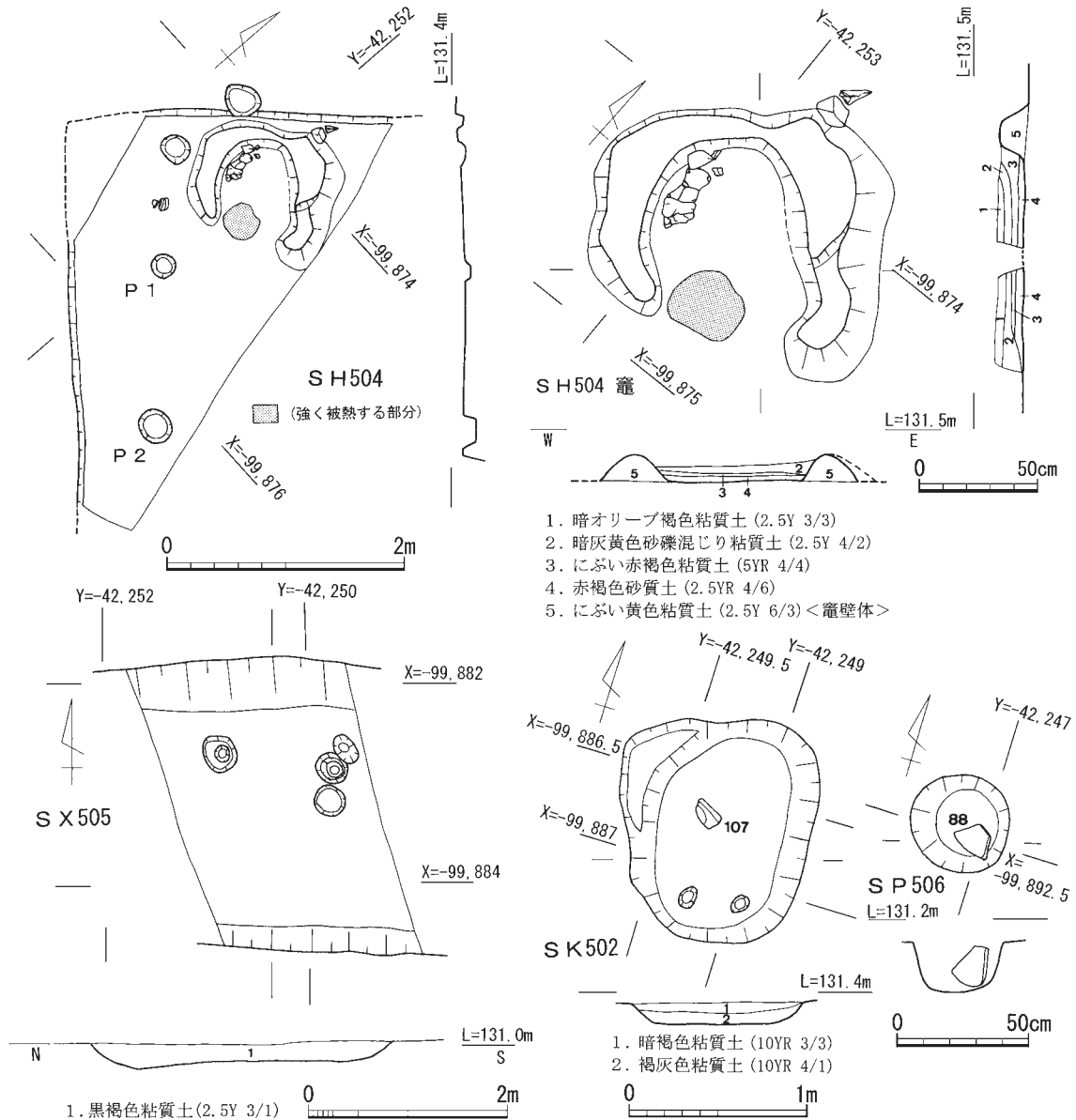
第23図 5・6区平面図(上:6区、下5区)



第24図 5・6区土層断面図

5・6区は、遺跡の西部で、南北に設定した調査区である。5・6区は、新たに計画された用水路の切土が行われる部分を調査対象とした。南北に細長いトレンチを設定したが、中央の側溝を挟み、北半と南半で調査前の現地形で約1.2mの段差があるため、北部を6区とし、南部を5区とした。旧地形は、緩やかな傾斜面であったとみられ、特に6区北部は丘陵側を断面「L」字に大きく削平されている。層序は、丘陵下部の5区南部では、上層から暗灰黄色粘質土、暗褐色礫混じり粘質土、中世遺物を包含する灰黄褐色砂礫混じり粘質土の順に堆積する(第24図)。奈良～平安期の遺構面を、調査区北部では標高約131.5m、南部では約131.1mで検出した。6区では、





第25図 竪穴式住居跡S H 504、落ち込みS X 505、土坑S K 502、柱穴S P 506実測図

耕作土以下、暗灰黄色砂混じり粘質土、中世遺物を包含する灰黄褐色礫混じり砂質土の順に堆積する(第24図)。調査面積は、5区は50㎡、6区は150㎡を測る。

**竪穴式住居跡S H 504**(第25図) 5区北部で検出した。一辺約4.0mの方形竪穴式住居跡である。西辺に沿って、主柱穴とみられる2基の柱穴(P 1・P 2)を検出し、対角に4主柱で構成される住居とみられる。北西辺の中央で馬蹄形に壁体が残存する竈を検出した。幅1.3m、長さ1.0mを測る。竈内から甕が出土している。時期は、出土土器から奈良時代後半と推定される。

**土坑S K 502**(第25図) 6区南部で検出した。長径約1.25m、短径約1.0m、深さ約0.15mの楕円形状の土坑である。瓦器片・砥石等が出土し、平安時代後期～鎌倉時代と推定される。

**落ち込みS X 505**(第25図) 5区中央で検出した落ち込みである。検出面での幅約5.8m、深さ0.2mを測る。断面は緩やかに落ち込み、底部は平坦で、東西方向に掘削された浅い溝の可能

性がある。埋土から、瓦器片が出土し、時期は、平安時代後期～鎌倉時代とみられる。

柱穴 S P 506 (第25図) 5区南端で検出した柱穴である。規模は径0.2m、深さ0.15mを測る。東播系の須恵器鉢が出土し、12世紀前半頃の柱穴とみられる。周辺に同一面で検出される数基の柱穴があるが、調査面積が限られ、建物跡や柱列を復原するには至っていない。

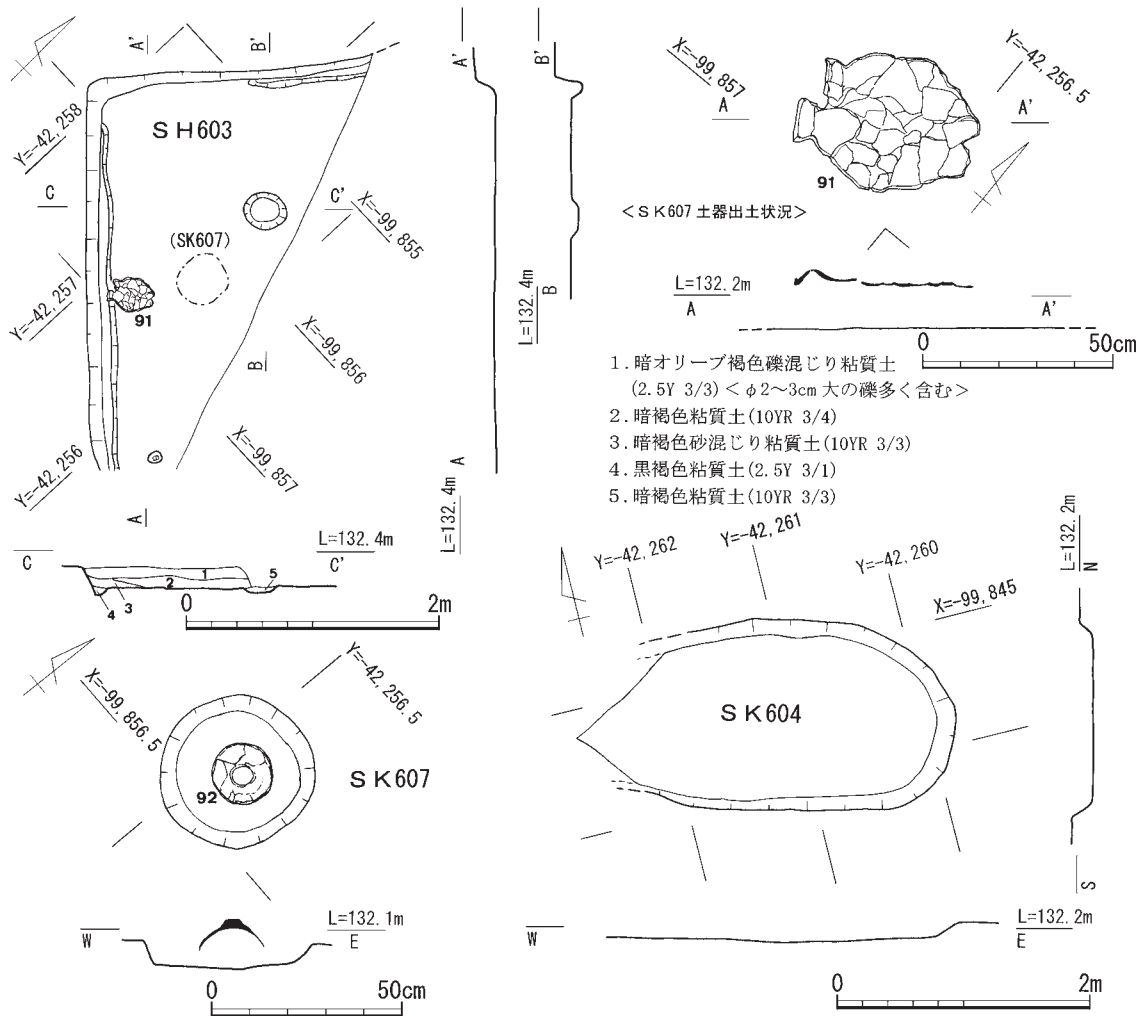
竪穴式住居跡 S H 603 (第26図) 6区南寄りで一部を検出した竪穴式住居跡である。一辺約4.1mの住居跡である。柱穴は、床面で1基を検出し、布留式甕1点が出土した。出土土器から、時期は古墳時代中期前半と推定される。

土坑 S K 604 (第26図) 6区の中央で検出した楕円形状の土坑である。残存長径2.8m、短径1.4m、深さ約0.15mを測る。出土遺物はなく、時期は不明である。

土坑 S K 607 (第26図) S H 603下層から検出した。径0.4m、深さ0.2mの小土坑である。弥生時代後期後葉の鉢2点が重ねられ、伏せられた状態で出土した。祭祀的な土坑である。

柱列 S A 601 (第23図) 6区東端で検出した柱列である。2間以上の規模をもち、柱間1.7～1.8mを測る。出土遺物はなく、時期は不明である。

柱穴 S P 605 (第23図) 6区中央東壁際で検出した。瓦器碗を出土し、12世紀前半の柱穴と推



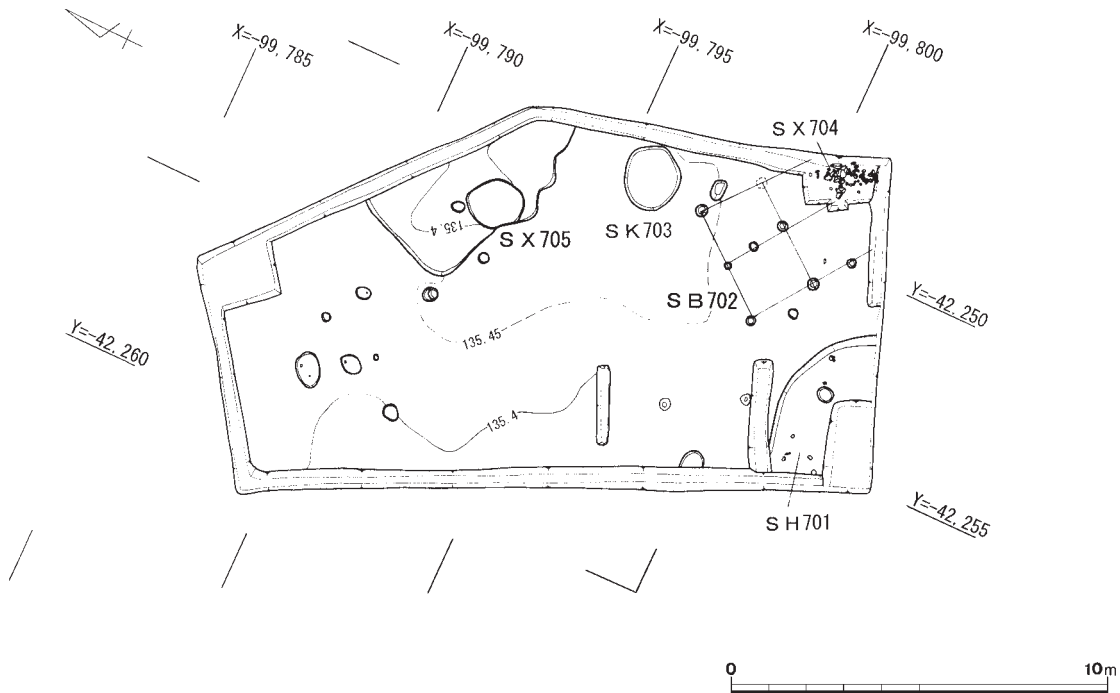
第26図 竪穴式住居跡 S H 603、土坑 S K 604・607実測図

定される。周辺で柱穴群を検出したが、建物跡の復原には至らなかった。

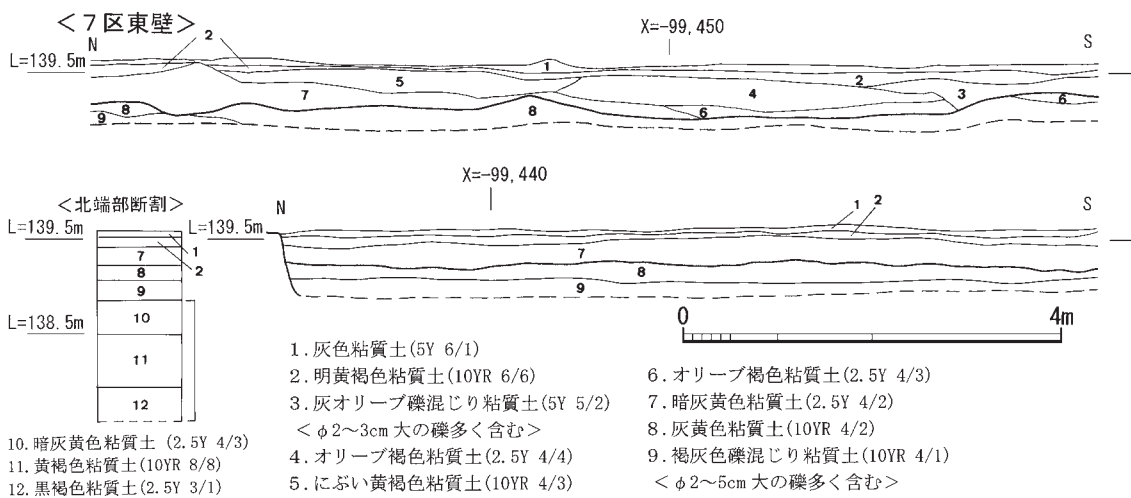
柱穴 S P 606 (第23図) 6区中央西寄りで見出した。丹波焼壺片を出土し、中世後期～近世前期の柱穴とみられる。

6) 7区の調査(第27図)

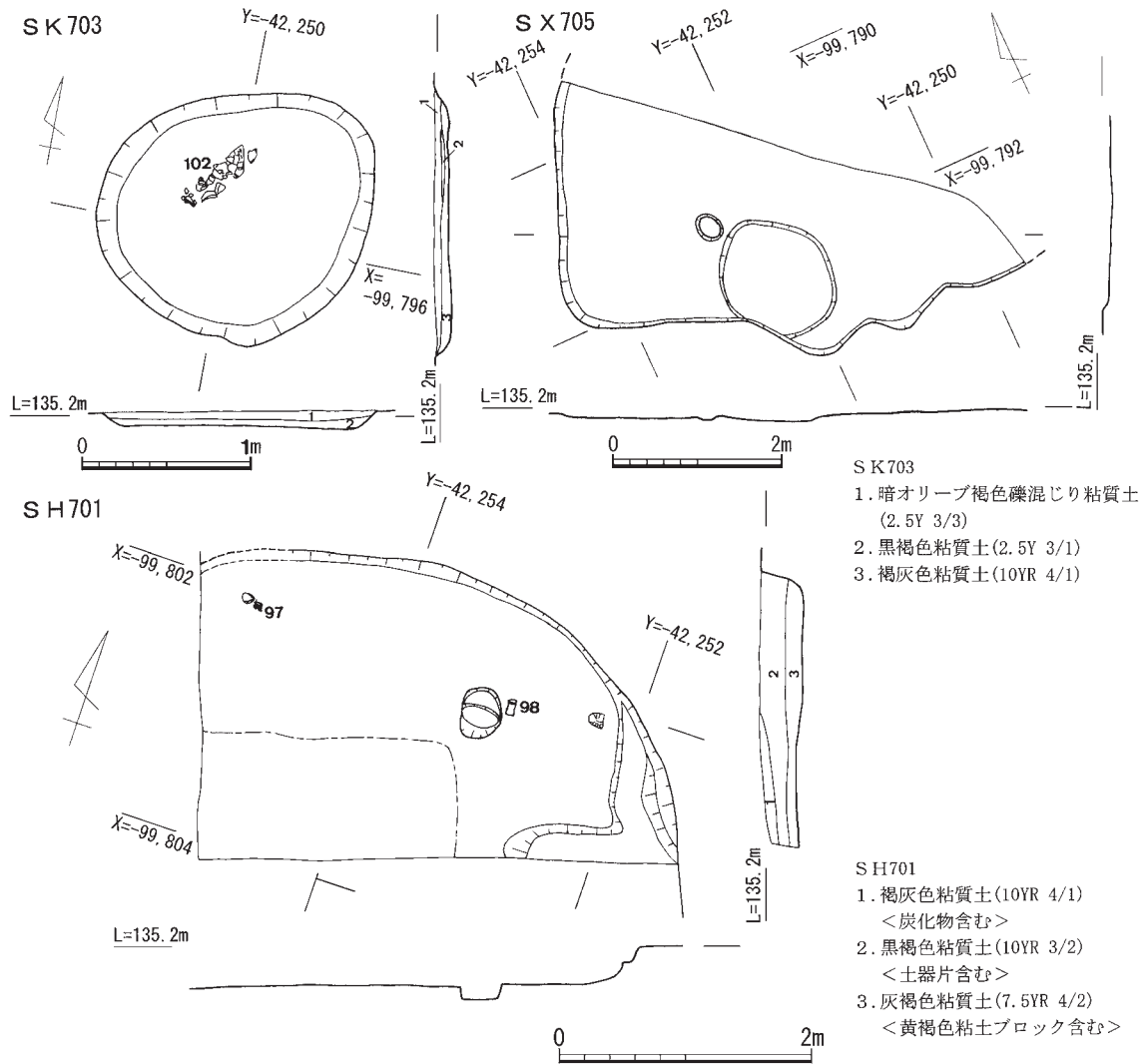
遺跡の北西に設定した調査区である。京都府教育委員会による試掘調査区(第15トレンチ)の周辺を拡張して調査したものである。東側の高まりは、古墳状に隆起しているため、平成16年度に八木町教育委員会による試掘が行われたが、周辺調査では古墳の兆候は確認されず、縄文時代の遺構と遺物や、中世の遺物が出土している。本調査では、標高約139.3m付近で遺構面を確認した。主な検出遺構は、縄文時代の土坑1基、同時期とみられる落ち込み、弥生時代後期の竪穴式住居



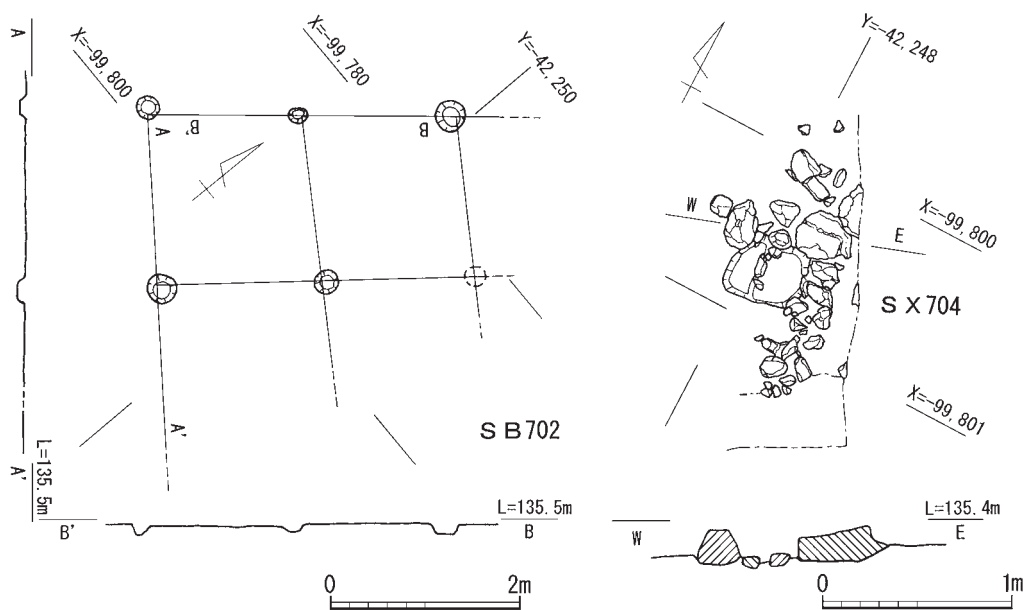
第27図 7区平面図



第28図 7区土層断面図



第29図 竪穴式住居跡SH701、土坑SK703、落ち込みSX705実測図



第30図 掘立柱建物跡SB702、集石SX704実測図

跡1基、平安時代後期以降の建物跡と集石遺構である。層序は、耕作土・床土以下に、暗褐色砂礫混じり粘質土、褐色砂礫混じり粘質土の順に堆積する。調査面積は150㎡を測る。

土坑S K 703(第29図) 直径1.6m、深さ0.15mの円形土坑である。土坑のなかから、縄文土器片が出土している。埋土中の炭化材の放射性炭素年代測定を行った結果、縄文時代晩期の年代観を得た。<sup>(注2)</sup>

落ち込みS X 705(第29図) 調査区北部中央で検出した落ち込みである。土器は出土していないが、埋土の状況から縄文時代の落ち込みの可能性はある。

竪穴式住居跡S H 701(第29図) 調査区南東隅で検出した住居跡である。床面で柱穴1基と、北部で焼土の広がりを検出した。吉備系高杯が出土し、弥生時代後期前葉の住居跡と推定される。また埋土中には、弥生時代中期の土器片を包含している。

掘立柱建物跡S B 702(第30図) 調査区南東で検出した建物跡である。2間×2間以上の規模をもち、柱間の間隔は、1.5～1.8mを測る。遺物は出土しておらず、時期は不明である。

集石S X 704(第30図) 調査区南東隅で一部を検出した集石である。幅約0.5m、長さ1.5mにわたって検出した。掘形は認められなかったが、石材の間隙から瓦器片が出土している。

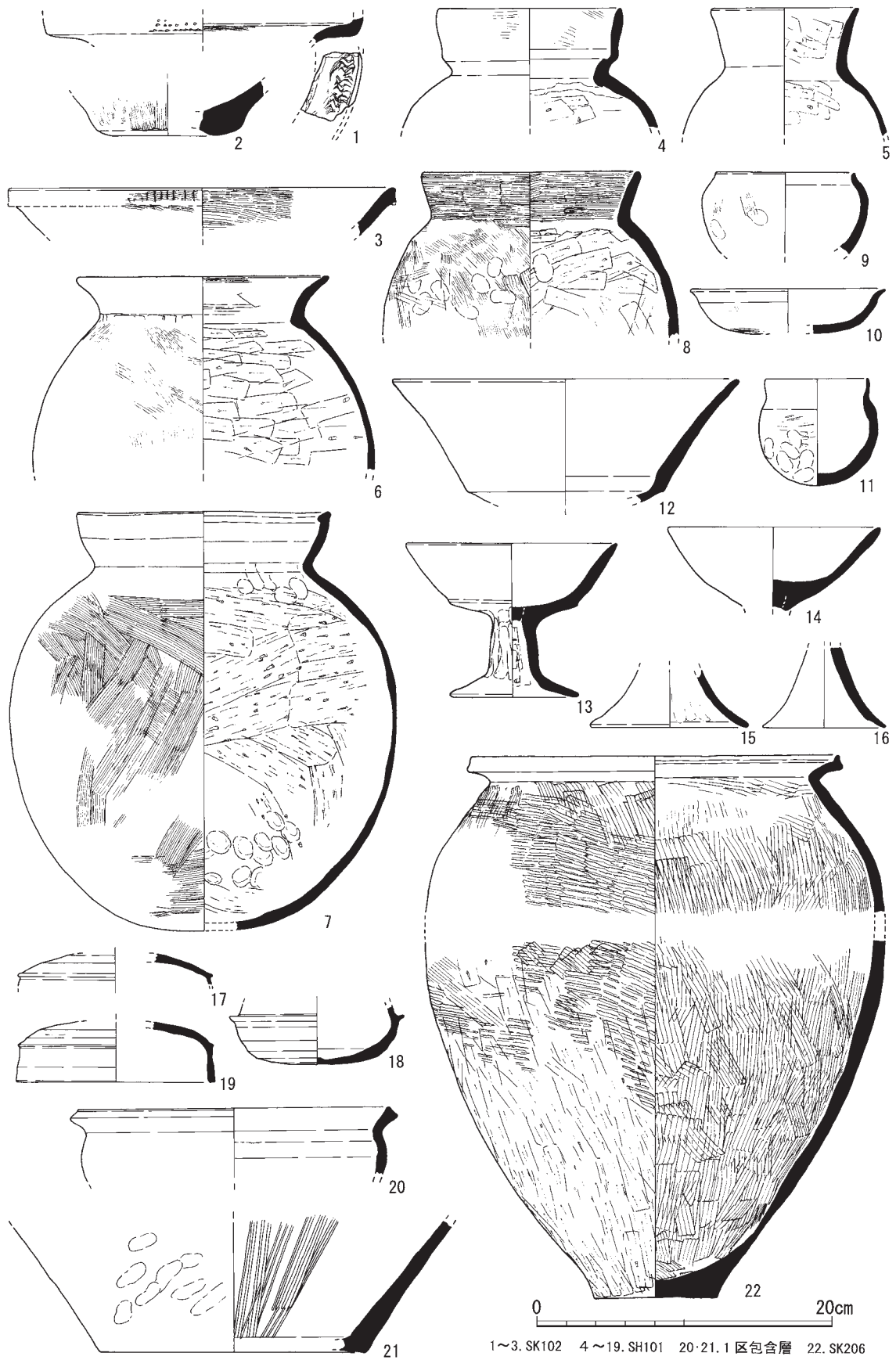
### 3. 出土遺物

出土遺物には、土器、鉄製品および石器があり、総量は整理箱26箱である。

#### 1) 土器

1～21(第31図)は、1区から出土した。1～3は、土壙S K 102から出土した。1は、近江系受口縁甕の一部で、野洲川周辺に特徴的な暗灰褐色の胎土をもつ。3は壺口縁端部で、端部外面に廉状文を施す。4～19は、竪穴式住居跡S H 101から出土した一括資料である。二重口縁壺(4)、直口壺(5)、短頸壺(6・8)、椀(9・10)、布留式甕(7)、土師器高杯(12～16)が出土している。高杯にはバラエティがあり、杯部が深いもの(12)と浅いもの(13・14)があり、脚部も裾部で外方に大きく開くもの(13)、緩やかに開くもの(15・16)がある。これらの資料には、須恵器が共伴し、有蓋高杯の蓋(17)、杯身(18)、杯蓋(19)がある。おおよそ陶邑窯T K 216～T K 208型式に相当し、5世紀前葉～中葉頃の資料である。最終段階の布留式甕と共伴する資料として注目される。20は、南東部の掘立柱建物跡周辺の精査中に出土した須恵器鉢である。篠窯産で、9世紀前葉に帰属する資料とみられる。21は、包含層中から出土した近世前期の丹波焼播鉢である。

22～29(第31・32図)は、2区から出土した。22・23は、土坑S K 206から出土した。23は、中央部から出土し、22はS K 206掘削時の西壁精査中に出土した。22は、弥生時代中期後半の甕である。口縁部は、端部が肥厚して摘みあげられ、体部外面にタタキ成形、下半にケズリ調整を行う瀬戸内系の甕である。23は、壺の下半部であり、外面に丁寧なミガキを施す。24は、土坑S K 222から出土した突帯をもつ壺の頸部である。細片ではあるが、弥生時代前期末～中期初頭の資料とみられる。25は、南東部の精査中に出土した壺の口縁である。また26・27は、竪穴式住居跡S H 201から出土した。26は甌の把手で、27は杯部外面に刺穴痕を残す高杯である。28・29は、



第31図 出土遺物実測図(1)



23. SK206 24. SK222 26・27. SH201 25・28・29. 2区包含層  
30～36. SH316 37. SK302 38・39. SH301 精査中 40～44. SH301 45・46. 3区包含層

第32図 出土遺物実測図(2)

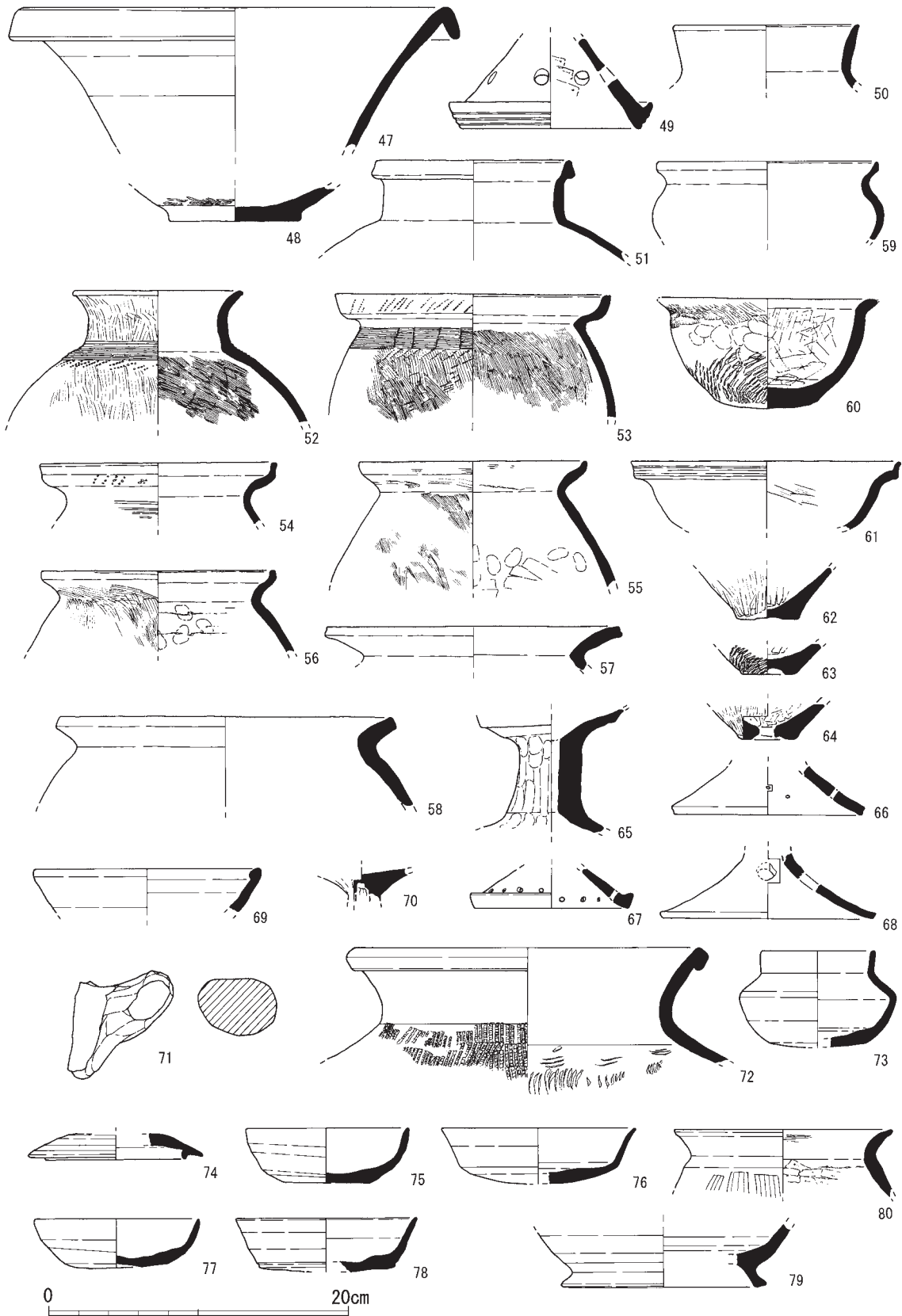
包含層中から出土した。28は、高台をもつ須恵器杯の底部で、奈良時代後期の資料である。また29は糸切り底をもつ須恵器杯で平安時代中期に帰属する。

30～49(第32・33図)は、3区から出土した。30～36は、竪穴式住居跡S H316から出土した土器で、30の小形甕と33の器台は、住居床面から出土した。おおよそ弥生時代後期中葉に帰属する。31の受口状口縁甕、32の高杯口縁部および34の底部は同時期のものだが、S H316埋土には弥生時代中期の近江系受口口縁甕(36)も含まれている。37は、古墳時代の竪穴式住居跡S H301の床面直下で検出した土坑S K302から出土した長頸壺の口縁部である。弥生時代後期後葉～末に帰属する。38・39は、同じくS H301の掘削中に出土した高杯(38)と受口状口縁鉢(39)で、いずれも弥生時代後期後葉～末の資料である。古墳時代中期の住居の構築時に、37～39の時期の遺構を削平したと考えられる。40～44は、竪穴式住居跡S H301から出土した土器で、このうち高杯(42)と小形丸底壺(44)は床面で出土したものである。42は杯部外面に刺穴痕をもつ高杯で、布留3式に帰属し、おおよそ古墳時代中期初頭の資料である。40・41は甕で、42は高杯である。45～49は、南丹市教育委員会による試掘区周辺の弥生時代中期後半の土器包含層中から出土したものである。46～48は、いわゆる生駒西麓産の角閃石を多く含む胎土をもつ。47の広口壺は、48の底部と同一個体である可能性が高い。45・46は壺口縁で、49は高杯脚部である。

50～82(第33・34図)は、4区から出土した。50～68は、土坑S K404から出土した土器である。50は、口縁部に面をなす短頸壺である。52は肩部に直線文と刺突列点文を施す近江系土器の文様系譜を引く壺である。53～58は甕である。近江系の受口口縁甕(53・54)と、無文の受口状口縁甕(55・56)および、「く」字口縁甕(57・58)がある。59は、口縁端部がわずかに立ち上がり、受口状口縁の影響を受けたとみられる鉢である。62～64は甕および甑の底部で、外面縦ハケを施すもの(62・64)と畿内系のタタキ成形を施すもの(63)がある。61は、擬凹線を口縁部に施す鉢ないし高杯で、65～68は、高杯の一部である。弥生時代後期後葉の資料(65・66・68)のほか、裾部に小円形の透かしを巡らせ、端部を跳ね上げる後期前半の高杯脚部(67)が含まれる。S K404の出土土器は、後期後葉の土器を中心とするが、図化していない資料のなかに弥生時代中期後半の凹線文系土器なども包含する。69は、落ち込みS X406から出土した布留式甕の口縁部である。70は、掘立柱建物跡S B403のP7から出土した土師器高杯である。杯部外面に刺突痕をもつタイプの最も新しい様相を示す資料で、時期はおおよそ5世紀前葉とみられる。71は、竪穴式住居跡S H402から出土した甑把手である。72～82は、炉跡S X407に付随する落ち込みS X410から出土した。72は、玉縁状の口縁端部をなす須恵器甕である。73は須恵器埴で、74は、宝珠つまみを欠損するが、内面に返りをもつ須恵器蓋である。75～78は須恵器杯Aで、75・77は、底部はヘラ起こし後、未調整であるが、76・78は、立ち上がりの屈曲がシャープで、丁寧に底部のヘラケズリを施す。79は、高台をもつ壺底部である。80～82は、土師器の甕で、口縁部が大きく外反する「く」字口縁をなし、外面に粗い縦ハケを施す。

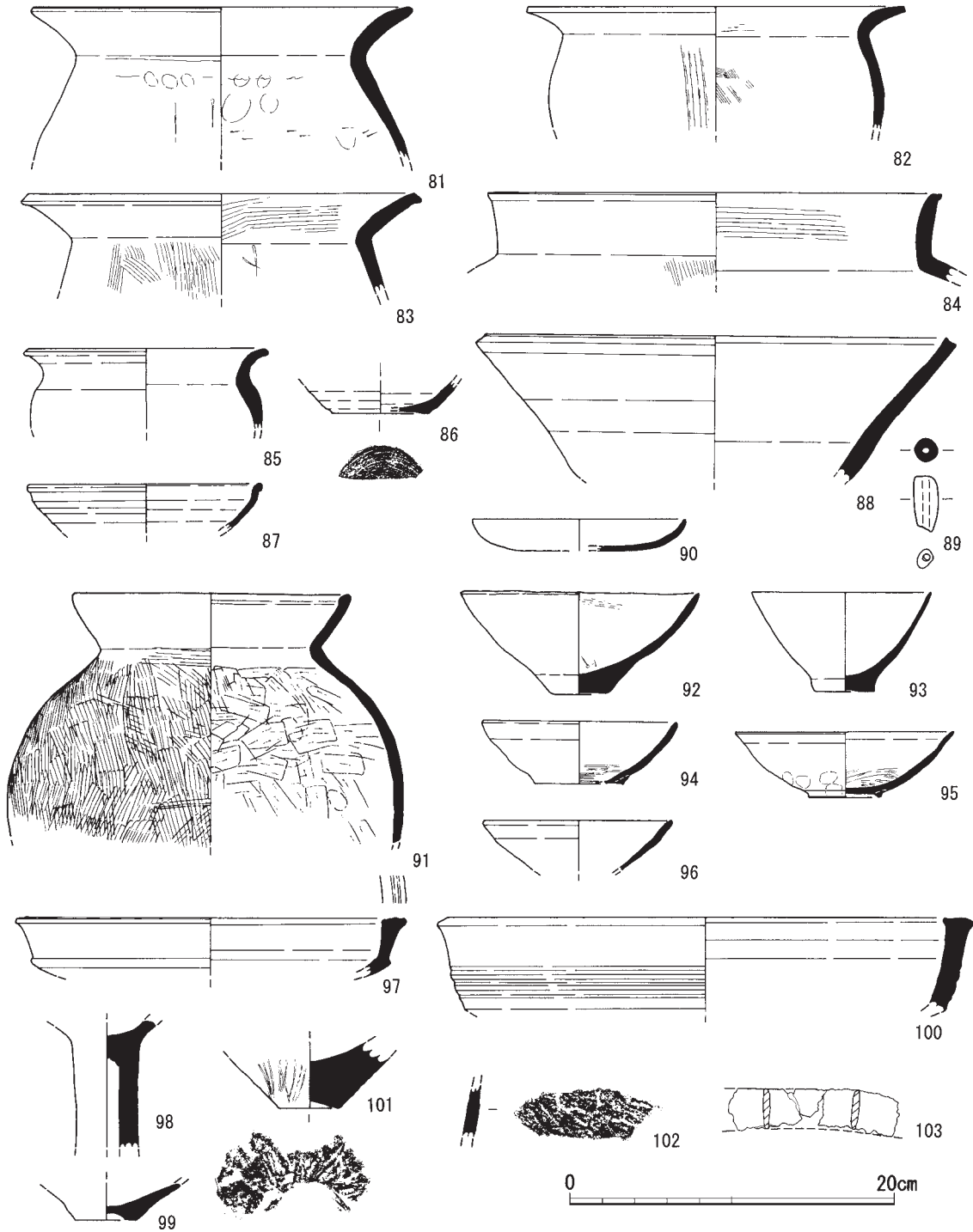
83～90(第34図)は、5区から出土した。このうち83～86は竪穴式住居跡S H504から出土した。83は「く」字口縁をなす土師器甕で、口縁端部を短く外方に引き出す。85は短く外反する口縁を





47~49. 3区包含層 50~68. SK404 69. SX406 70~71. SH402 72~80. SX410

第33図 出土遺物実測図(3)



81・82. SX410 83～87. SH504 88. SP506  
89. SX505 90. SK502 91. SH603 92・93. SK607 95. SP605 94・96. 6区包含層 97～100. SH701 101・102 .SK703 103. 4区 SX407

第34図 出土遺物実測図(4)

なす小形の甕である。外面はナデ調整を施す。86は須恵器杯で、底部外面に糸切りが認められる。88は、柱穴S P 506から出土した東播系の須恵器鉢である。口径28.3cmを測る。11世紀後半～12世紀の所産とみられる。89の土錘は、S X 505から出土した。一部を欠損するが、残存長約3.5cm、厚さ1.5cmを測る。共伴資料に瓦器細片を含み、平安時代後期以降の資料と推定される。90は、土坑S K 502から出土した土師器小皿で、口径13.1cmを測る。12世紀後半頃のものであろう。

91～96(第34図)は、6区で出土した。91は、竪穴式住居跡S H603から出土した布留式甕である。口径16.8cmを測る。外面は粗い縦ハケを施す最終段階の甕で、5世紀前半の所産とみられる。92・93は、S H603の下層で検出した土坑S K607から折り重なり出土した鉢である。摩耗が著しいが、薄く仕上げられ、外面はハケ調整によるものとみられる。弥生時代後期後葉の土器である。94～96は瓦器椀で、95は柱穴SP605から出土した。12世紀後半の資料とみられる。94・96は、包含層中から出土したもので、94は13世紀前葉、96は13世紀中頃のものであろう。

97～102(第34図)は、7区から出土した。97～100は、竪穴式住居跡S H701から出土した。97・98は高杯で、このうち97は端面に擬凹線を施す吉備系高杯である。丹波地域では初出の資料であり、後期前葉の所産である。100は、弥生時代中期末の広口壺口縁部で、混入資料とみられる。101・102は、土坑703から出土した縄文土器である。101の底部は、縄文時代後期～晩期の資料とみられる。102は細片であるが、いわゆる生駒西麓産の角閃石を多く含む胎土をもつ。

## 2)鉄製品

103(第34図)は、炉跡S X407から出土した。炉底で出土したもので、鉄鎌とみられる。残存長10.6cm、刃部幅2.3cmを測る。刃部、基部の一部を折損し、折り返しは確認できない。

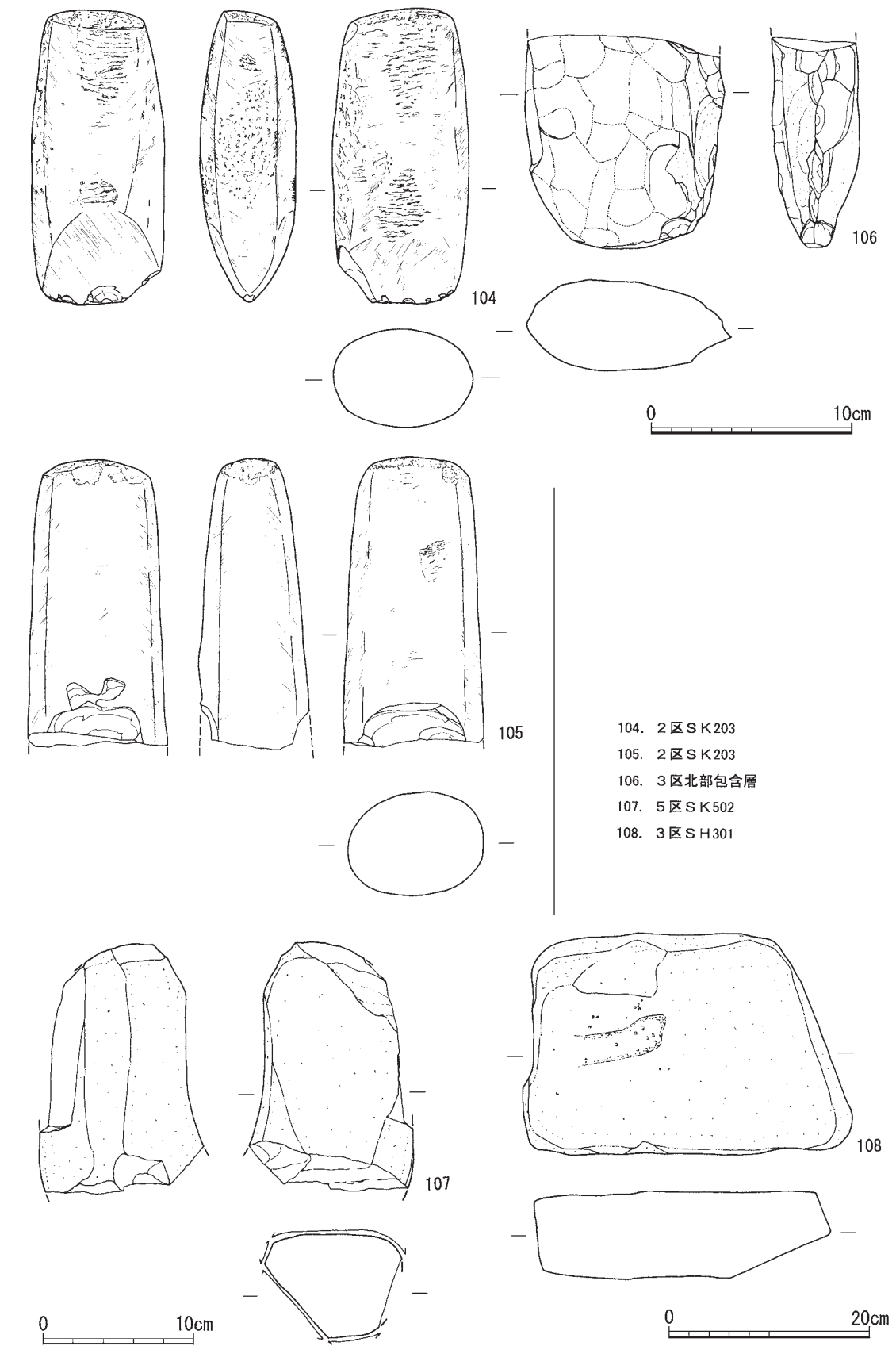
## 3)石製品

104・105(第35図)は、2区S K203において、一括して出土した太型蛤刃石斧である。

104は、完存品である。ずんぐりとした形状である。使用損耗、あるいは折損した刃部を再生したものであろう。全長約14.7cm、最大幅約6.6cm、最大厚約4.9cmを測る。閃緑岩製である。

A・B両面は、刃部にかけて、丁寧に研磨調整が行われている。頭頂部は成形時の敲打痕跡が著しく、研磨調整は施されていない。側縁にも成形時の敲打痕が多く残る。刃部には使用に伴って生じたとみられる剥離痕跡が認められる。A・B両面、両側面に二次的な使用痕が多数認められる。線状のつぶれが平行に連続して、あばた状の痕跡となったものである。104では狭い範囲に認められたが、当該例では広い範囲に認められる。剥片石器加工用台石としてあるいは敲打具として用いられたものであろう。

105は、器体半ばで折損したもので、刃部が失われている。残長約14.2cm、頭頂部幅約5cm、折損部幅約7cm、最大厚約5.5cmを測る。閃緑岩製である。器表面は丁寧に研磨調整が施され、光沢を帯びている。頭頂部は研磨されておらず、成形時の敲打痕がそのまま残されている。折損部位には、A・B両面共に、横約5cm、縦約3cmの蝶番剥離が認められる。これは、刃部先端側から垂直な強い力を受けたことによるもので、石斧の使用に伴う折損状況を示す資料として興味深い。B面には、二次的な使用痕跡が認められる。線状のつぶれが平行に連続して、あばた状の痕跡となったものである。破損後に、剥片石器加工の用の台石として転用された可能性がある。106(第35図)は、3区北部下層溝から出土した敲打成形痕跡のある円礫である。全長約10.6cm、最大幅約9.7cm、最大厚約4.5cmを測る。砂岩製である。上半は折損して失われている。成形痕は、主に、A面に認められる。自然礫面に対してハンマーを垂直に構え、敲打し、礫面を剥がす、いわゆるベッキングの手法である。A面側は、剥離がほぼ完了している。B面側は、側縁と下端か



第35図 出土遺物実測図(5)

ら施された成形剥離が認められる以外は、未調整である。下端部には、研磨調整痕が施されている。当該資料は、A面の剥離がほぼ完了し、B面の剥離の準備として施した側縁に対する剥離成形段階で折損し、放棄されたものであろう。小型磨製石斧の石核であろう。

107(第35図)は、平安時代後期の5区SK502から出土した砥石である。砂岩製の砥石である。形状は、平面が長方形で、断面が台形を呈する。砥面は、器体主軸と平行して形成され、5面以上認められる。下端と側縁の一部が欠損している。残存長約16.5cm、最大幅約11cmを測る。

108(第35図)は、3区の前古墳時代中期の竪穴式住居跡SH301から出土した台石である。住居跡の東隅で据え置かれた状態で検出された。台石は、長方形の板状の砂岩を利用したもので、未加工である。表裏に平滑な自然面がみられ、一部に、使用に伴うとみられる研磨、敲打が認められる。面の一方を底面とし、一方を作業面として利用したようである。法量は、長辺約34cm、短辺約22cm、最大厚約8cmを測る。

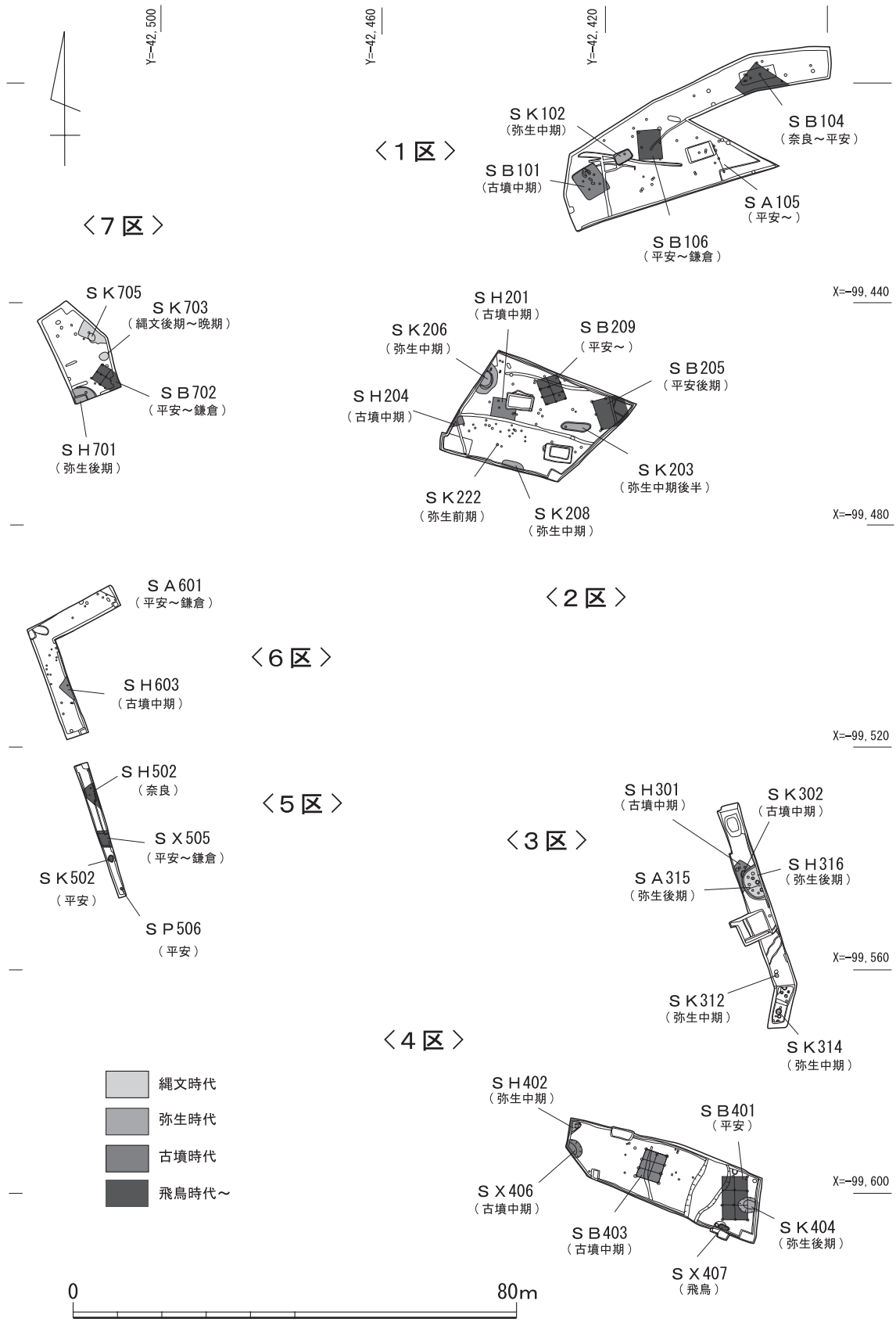
#### 4. まとめ

今回の調査では、大谷口遺跡の北部を中心に調査し、縄文時代から中世にかけての多くの遺構を検出した。主な検出遺構は、縄文時代後期～晩期の土坑1基、弥生時代中期の土壙群、同後期の竪穴式住居跡1基、古墳時代中期の竪穴式住居跡6基・掘立柱建物跡1棟、飛鳥時代の炉跡1基、および奈良～鎌倉時代にかけての掘立柱建物跡である。

縄文時代の遺構は、遺跡北西部の7区で検出した。この周辺では、南丹市教育委員会による平成16年度の調査において、縄文時代後期後半と推定される溝や土器が検出されていたが、今回の調査でも縄文時代後期後半～晩期と推定される土坑1基を検出した。縄文土器は3区の調査でも包含層中から小片が出土し、遺跡の広い範囲に分布している。

弥生時代の遺構は、遺跡の各調査区で確認された。2区では、弥生時代前期末～中期初頭と推定される遺構は小土坑を検出した。また弥生時代中期の遺構としては、1区の方形土坑、2区の水場に形成されたとみられる中期後半の土器が出土した円形土坑や、磨製石斧2点が出土した楕円形土坑がある。さらに、3区では土器棺を埋納したとみられる土壙や、弥生時代中期と推定される土壙群を検出した。弥生時代中期の遺物は、遺跡南西の5・6区以外の各調査区で出土している。この時期の亀岡盆地北部の拠点集落は、大谷口遺跡から南へ1.5kmの池上遺跡であるが、今回の調査によって拠点集落の周縁部である山麓部において、小規模な集落域や活動域が展開することが判明した。

弥生時代後期の遺構は、7区で後期前葉と推定される竪穴式住居跡の一部を検出し、3区で後期中葉の竪穴式住居跡1基を検出した。後期前半期の住居跡は、これまで亀岡盆地内でもほとんど確認されていなかったが、大谷口遺跡周辺の山麓部では、東に隣接する諸畑遺跡にも検出例があり、盆地北端の山麓部に後期前半の住居が点在することが明らかとなった。一方、弥生時代後期後葉～末の遺構は、遺跡北部の2区や、遺跡中央部の4区、さらに西部の6区で小土坑を検出した。弥生時代後期後葉～末頃の土器は、各調査区の包含層中に含まれている。弥生時代後期の



第36図 調査区遺構変遷図

住居跡は、諸畑遺跡や野条遺跡南部でも焼失住居などの検出例があり、野条遺跡から北部の山裾部にかけて、池上遺跡の立地する中期の集落域よりもやや標高の高い地点を中心に後期の集落域が広がるとみられる。

歴史時代の遺構は、飛鳥時代の炉跡をはじめ、奈良時代末～鎌倉時代にかけての掘立柱建物跡や柱穴群を検出した。飛鳥時代の遺構は、これまで周辺遺跡でもほとんど検出されていない。また、掘立柱建物跡は時期を確定できるものが少ないが、平安時代後期～鎌倉時代にかけてのものが多いとみられ、野条遺跡の同時期の集落との関係が注目される場所である。

今回の調査の中で、最も大きな成果は、古墳時代中期の住居跡を広い範囲で確認したことであろう。中期の竪穴式住居跡は、北部の1・2区で3基の竪穴式住居跡を検出し、東部の3・4区では2基の竪穴式住居跡と1棟の掘立柱建物跡を、また西部の5区でも1基の竪穴式住居跡を検出した。いずれも出土した土器から、古墳時代中期前半の住居跡であることが判明している。なかでも注目されるのは、4区で掘立柱建物跡1棟が確認されたことで、この周辺が集落の中心的



第37図 大谷口遺跡・諸畑遺跡調査区位置図

な地区であることを窺わせるものである。5世紀初頭～中葉頃の住居跡は、近年、周辺遺跡で調査例が増加し、隣接する諸畑遺跡では近畿地方でも最古段階の導入期竈を付設する住居跡が検出され、大いに注目を集めた。今回検出した住居跡も、1区のSH101と4区のSH401は、いずれも5世紀前半～中頃の導入期の竈をもつ住居跡である。そのなかでも特に注目されるのはSH101の竈の構造であり、焚き口に直方体の立石を配するものである。竈の焚き口に立石や「ハ」字状に石材を配置する事例は、諸畑遺跡や池上遺跡ほか、大堰川上流域にあたる日吉町天若遺跡でも検出されている。天若遺跡では、後期の竈に直方体の立石をもつタイプが複数確認され、今回の事例はその初現的な形態となるものとみられる。諸畑遺跡と大谷口遺跡は、小尾根状を呈する天井川となっていた官山川に分断されているが、地形的には連続する丘陵裾部の緩やかな傾斜地にあり、弥生～古墳時代の遺構群が官山川の基部にもみられることから、本来は同一の集落域として捉えることができるものである(第37図)。平成14年度に本格化したほ場整備と府道建設事業に伴う調査によって、西部の室橋遺跡でも5世紀前半期の導入期竈をもつ住居跡が検出され、今回の大谷口遺跡の調査でも同時期の住居群が検出されたことにより、古墳時代中期前半に先進的な技術をもつ地域集団が亀岡盆地北麓の広い範囲で集落域を形成したことが明らかとなった。5世紀前半のこうした新たな開発を進めた地域勢力が台頭する背景について、亀岡市坊主塚古墳や八木町城谷口古墳群など盆地北部の古墳群の動向とあわせ、今後、検討してゆく必要がある。

注1 調査にあたって、広島大学文学部准教授野島永氏、滋賀県教育委員会大道和人氏に、4区炉跡SX407の構造等についてご教示を得た。調査参加者は以下のとおりである(順不同)

作業員：広瀬伊佐夫・杉山雅之・松本敏子・笠浪恒正・麻田忠晴・宅間文治・福本正吉・松本拓・三髯順子・平井美登里・平井義次・国府京子・矢木正代・竹井美津子・中川智子・服部良彦・明田とし枝・川勝武・浅田文雄

調査補助員：石崎佐栄子・國府恵利・廣瀬慶典・斎藤文彦・松井大裕・安井瑛介・長屋里美・清水香萌・越智大作・岸本雅奈・大西遼・曾根由梨

整理員：茶園矢壽子・清水友佳子・石崎佐栄子・福島厚子・近澤富美代・小間宏美・野中完樹

注2 土坑SK703から出土した炭化物の放射性炭素年代測定を(株)加速器年代研究所に依頼した。出土試料の14C年代は $2670 \pm 30$ yrBPであり、縄文時代晩期中葉頃に相当する年代値となっている。

#### 参考文献

- 谷口悌『町内遺跡発掘調査報告書 大谷口古墳1号墳・大谷口古墳2号墳』(八木町教育委員会) 2005  
 辻健二郎『大谷口遺跡第2次発掘調査報告書』(南丹市教育委員会) 2008  
 辻健二郎『南丹市内遺跡発掘調査報告書 平成20年度大谷口遺跡第3次』(南丹市教育委員会) 2009  
 奈良康正『大谷口遺跡第4次調査』(『京都府埋蔵文化財調査報告書』平成20年度 京都府教育委員会) 2009  
 福島孝行「諸畑遺跡第4次」(『京都府遺跡調査概報』第119冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2006  
 三好博喜『天若遺跡 京都府遺跡調査報告書』第20冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター 1994



# 圖 版



大谷口遺跡全景<右後方に池上遺跡>(北西から)



(1)大谷口遺跡遠景<左後方に室橋遺跡> (東から)



(2)大谷口遺跡遠景<右後方に諸畑遺跡> (西から)



(1)大谷口遺跡全景(南から)



(2)1・2区近景(西から)



(1) 1区全景(上が北西)



(2) 1区全景(南西から)

(1) 1・2区調査前全景(南から)



(2) 土壙 S K102(北西から)



(3) 土壙 S K103(東から)





(1) 竪穴式住居跡 S H101 (南東から)



(2) 竪穴式住居跡 S H101 竈 (南東から)



(1) 竪穴式住居跡 S H101 竈前庭  
遺物出土状況(南東から)



(2) 竪穴式住居跡 S H101  
遺物出土状況(上が北西)



(3) 竪穴式住居跡 S H101 竈  
断ち割り(南から)





(1) 1区東部全景(北西から)



(2) 掘立柱建物跡 S H104  
(北西から)



(3) 1区南壁土層断面(西から)



(1) 2区全景(南西から)



(2) 2区全景(北西から)



(1) 土坑 S K 203 (北西から)



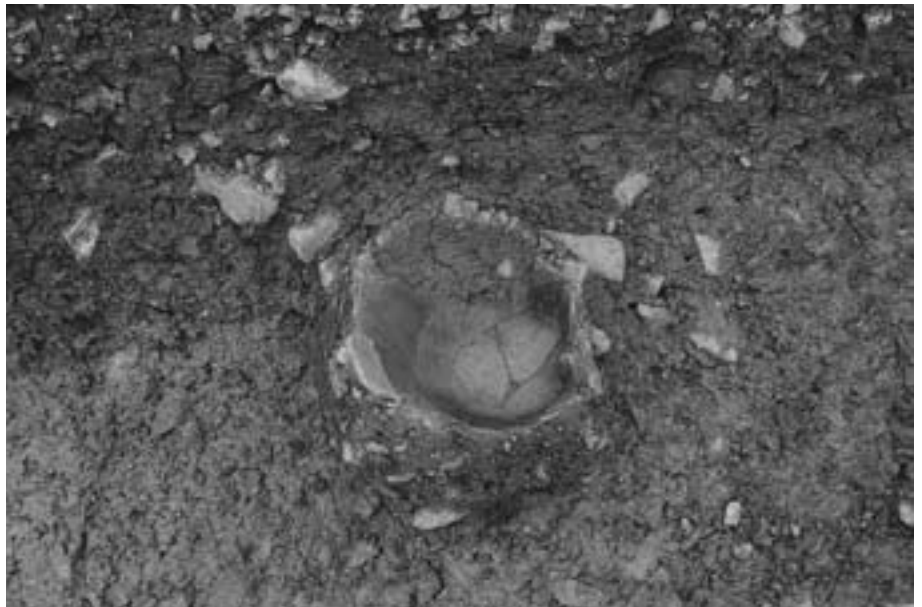
(2) 土坑 S K 203 遺物出土状況  
(南から)



(3) 土坑 S K 222 遺物出土状況  
(南から)



(1) 土坑 S K206 (南から)



(2) 土坑 S K206 遺物出土状況  
(上が北西)



(3) 竪穴式住居跡 S H201 (南から)



(1) 掘立柱建物跡 S B 209(南から)



(2) 2区南部柱穴群検出状況  
(北西から)



(3) 2区北壁土層断面(南西から)



(1) 3・4区全景<後方に官山川・諸畑遺跡> (西から)



(2) 3区全景(上が北東)



(1) 3区全景<下層遺構面>  
(北西から)



(2) 3区南部遺構検出状況(北から)



(3) 竪穴式住居跡 S H316(西から)

(1) 柱列 S A315(南東から)



(2) 土壇 S K312(南東から)



(3) 土坑 S K302(南東から)







(1) 3区東壁南部土層断面(西から)



(2) 土坑S K314(南西から)



(3) 3区全景<上層遺構面>  
(北西から)

(1) 竪穴式住居跡 S H301  
(北東から)



(2) 竪穴式住居跡 S H301  
遺物出土状況(北西から)



(3) 竪穴式住居跡 S H301台石  
出土状況(南西から)





(1) 4区全景(上が北東)



(2) 4区全景(南東から)

(1) 土坑 S K404 (東から)



(2) 掘立柱建物跡 S B403  
(南西から)

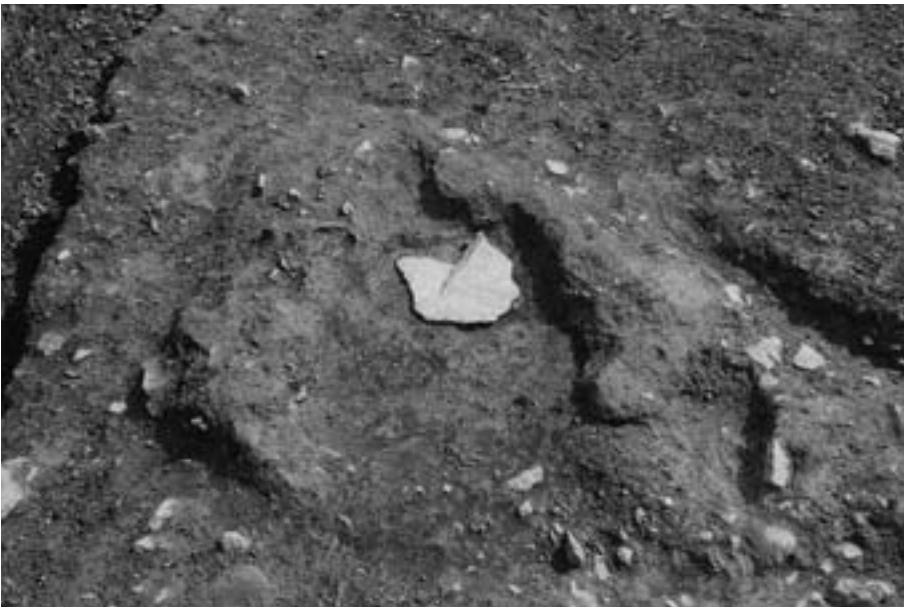


(3) 掘立柱建物跡 S B403 柱穴 P 7  
(北西から)





(1) 竪穴式住居跡 S B 402(西から)



(2) 竪穴式住居跡 S B 402竈  
(西から)



(3) 炉跡 S X 407 <南部拡張前>  
(北西から)



(1) 炉跡 S X407、落ち込み S X410  
(北東から)



(2) 炉跡 S X407(北西から)



(3) 炉跡 S X407断ち割り  
(北東から)



(1) 炉跡 S X407、落ち込み S X410  
(南東から)



(2) 落ち込み S X410遺物出土状況  
(北東から)



(3) 掘立柱建物跡 S B401  
(北東から)



(1) 5・6区調査前全景(南から)



(2) 5区全景(北西から)



(3) 5区南部遺構検出状況  
(北西から)





(1) 竪穴式住居跡 S H504  
(南東から)



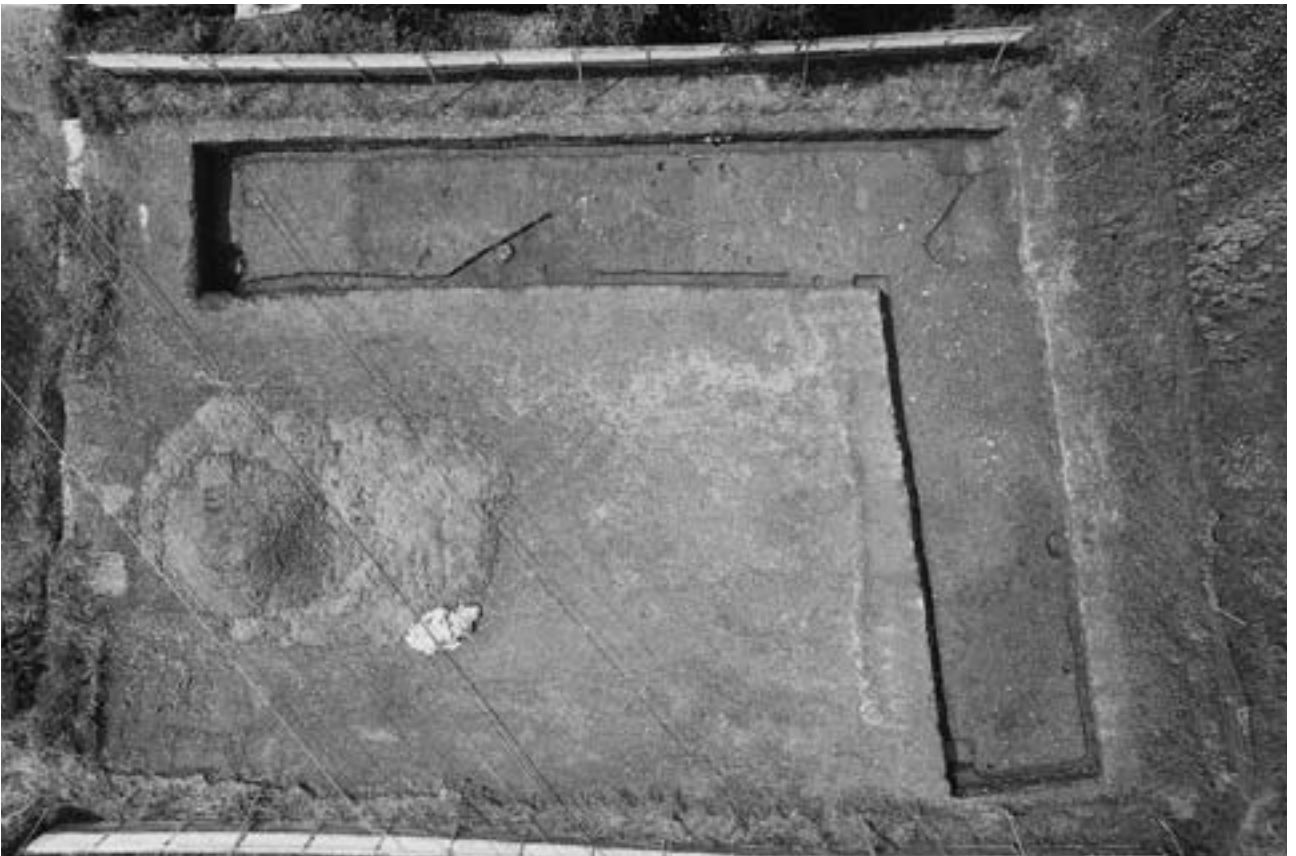
(2) 柱穴 S P506遺物出土状況  
(東から)



(3) 落ち込み S X505(北西から)



(1) 6・7区近景(南東から)



(2) 6区全景(上が南西)



(1) 6区南部遺構検出状況土層断面  
(南東から)



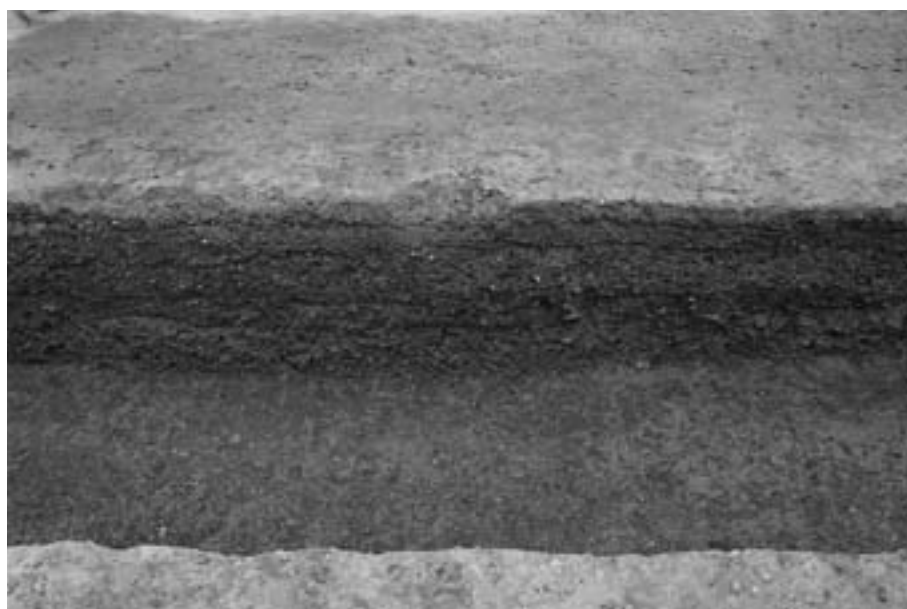
(2) 竪穴式住居跡 S H603  
(北東から)



(3) 竪穴式住居跡 S H603  
遺物出土状況(北東から)



(1) 土坑 S K607(上が北東)



(2) 5区東壁土層断面(南西から)



(3) 6区西壁土層断面(北東から)



(1) 7区全景(上が北東)

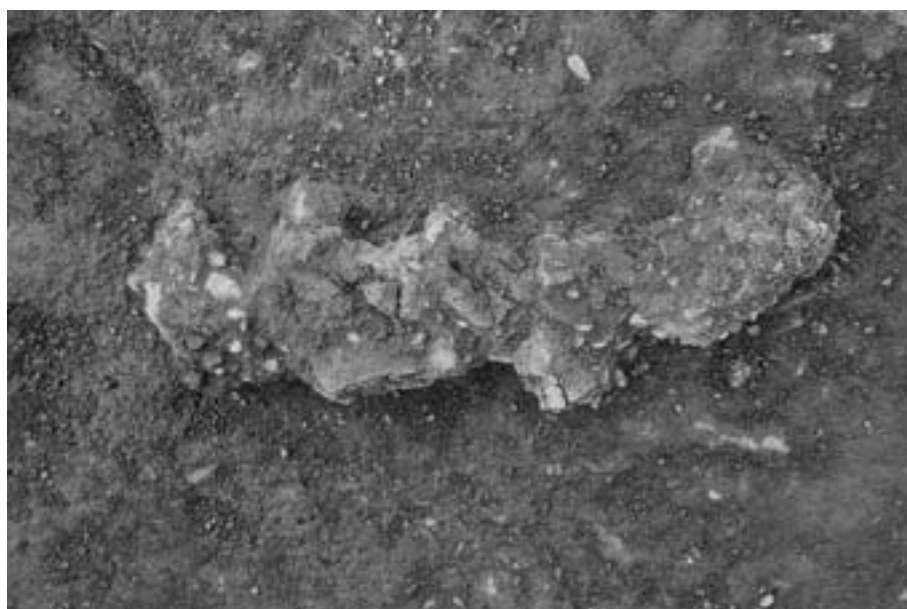


(2) 7区全景(南東から)

(1) 土坑 S K703(南西から)



(2) 土坑 S K703遺物出土状況  
(上が北西)

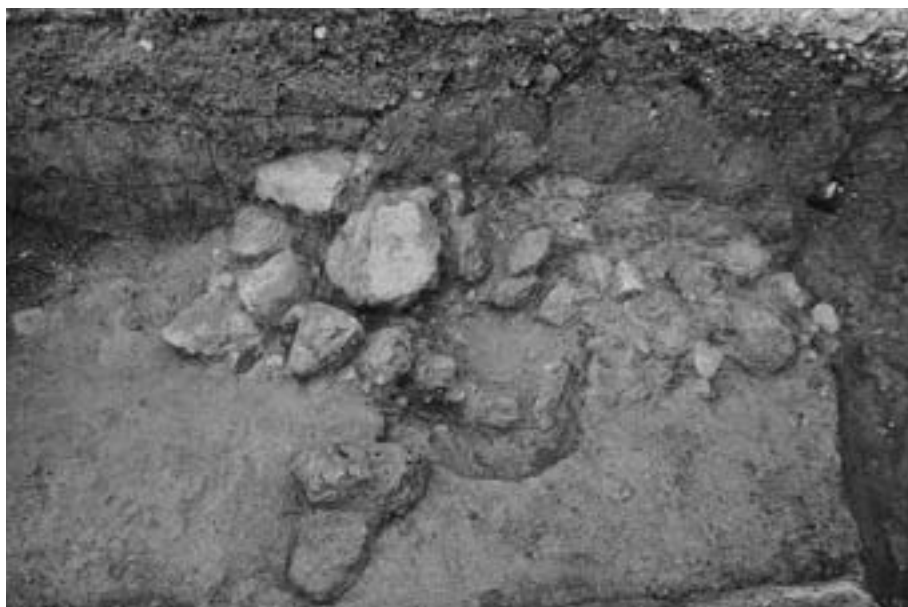


(3) 竪穴式住居跡 S H701  
(北西から)





(1) 7区東壁土層断面(南西から)



(2) 集石遺構S X704(南西から)



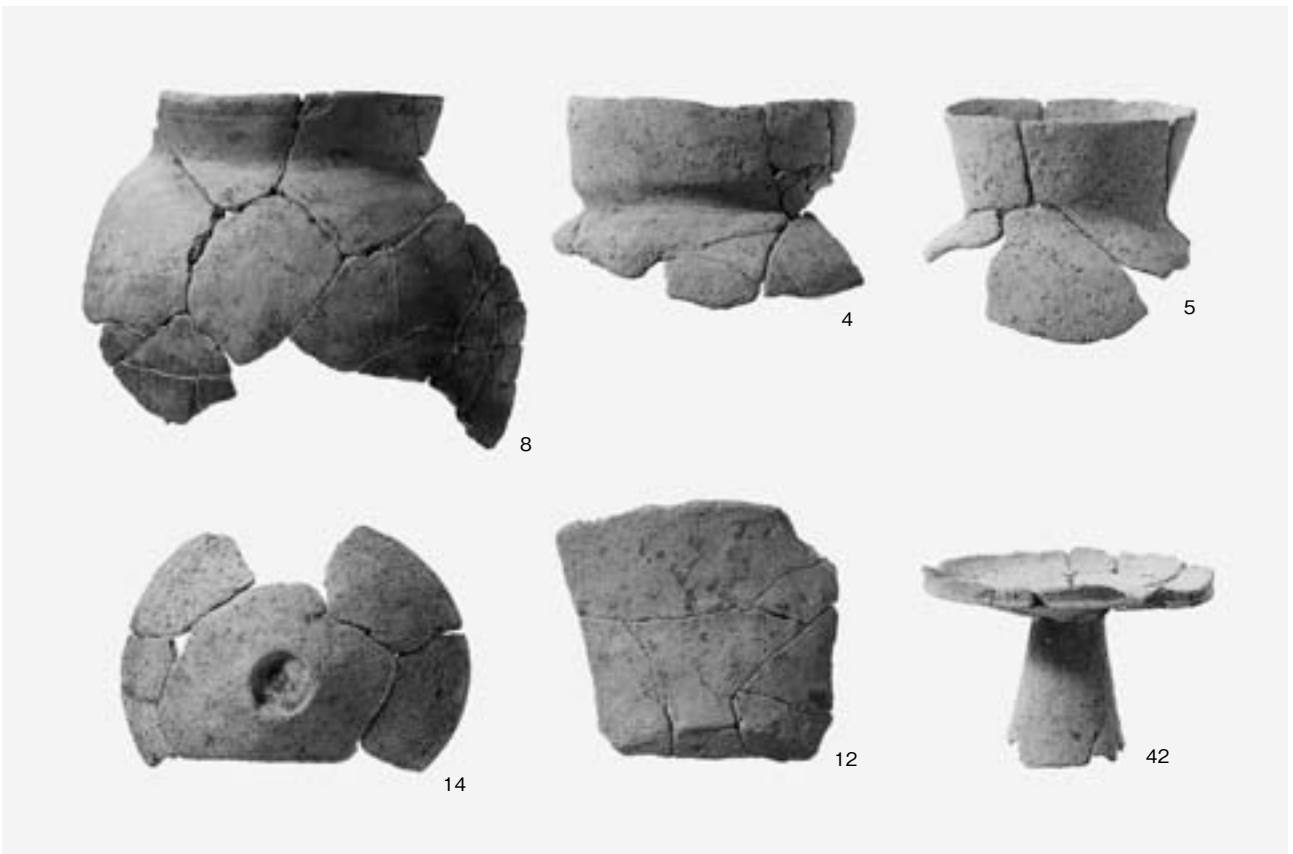
(3) 作業風景<1区> (北東から)



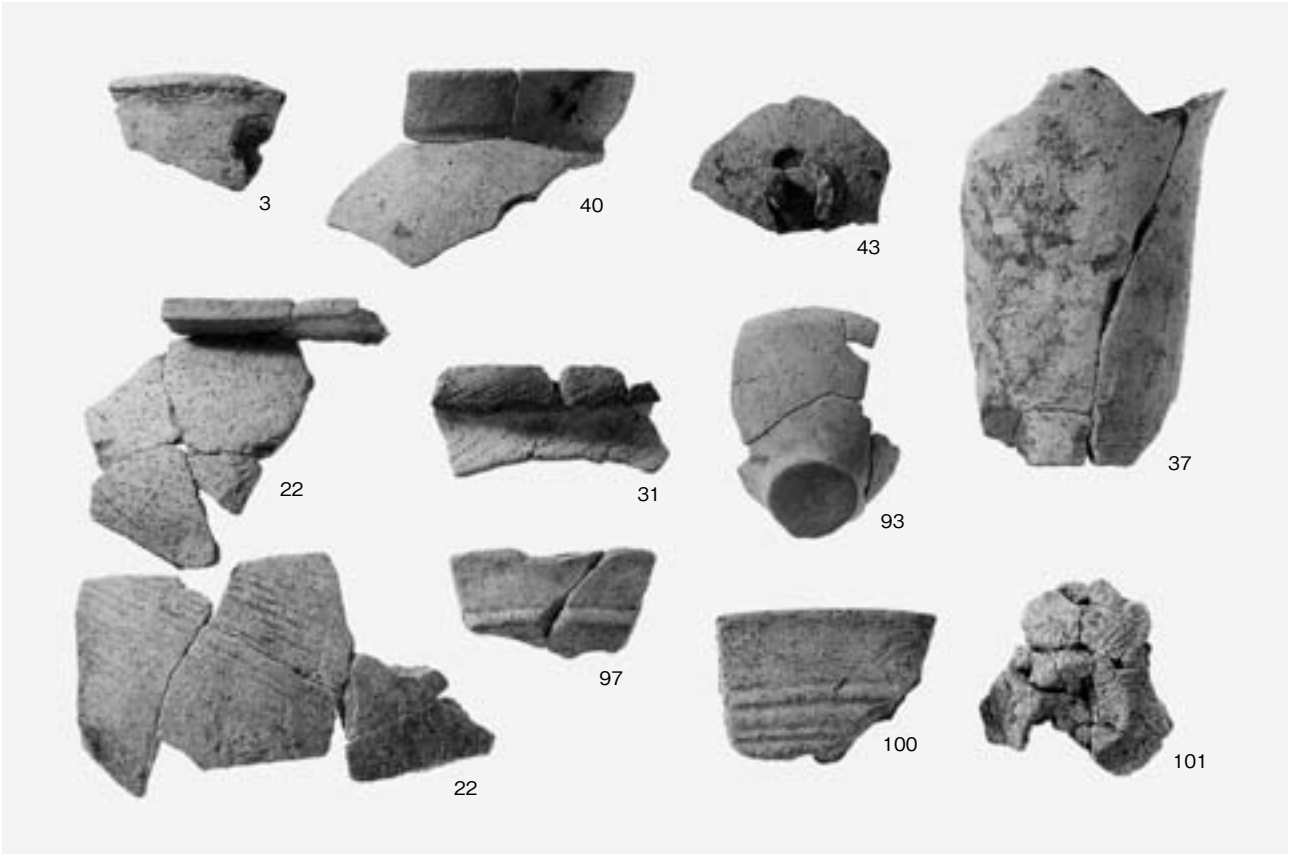




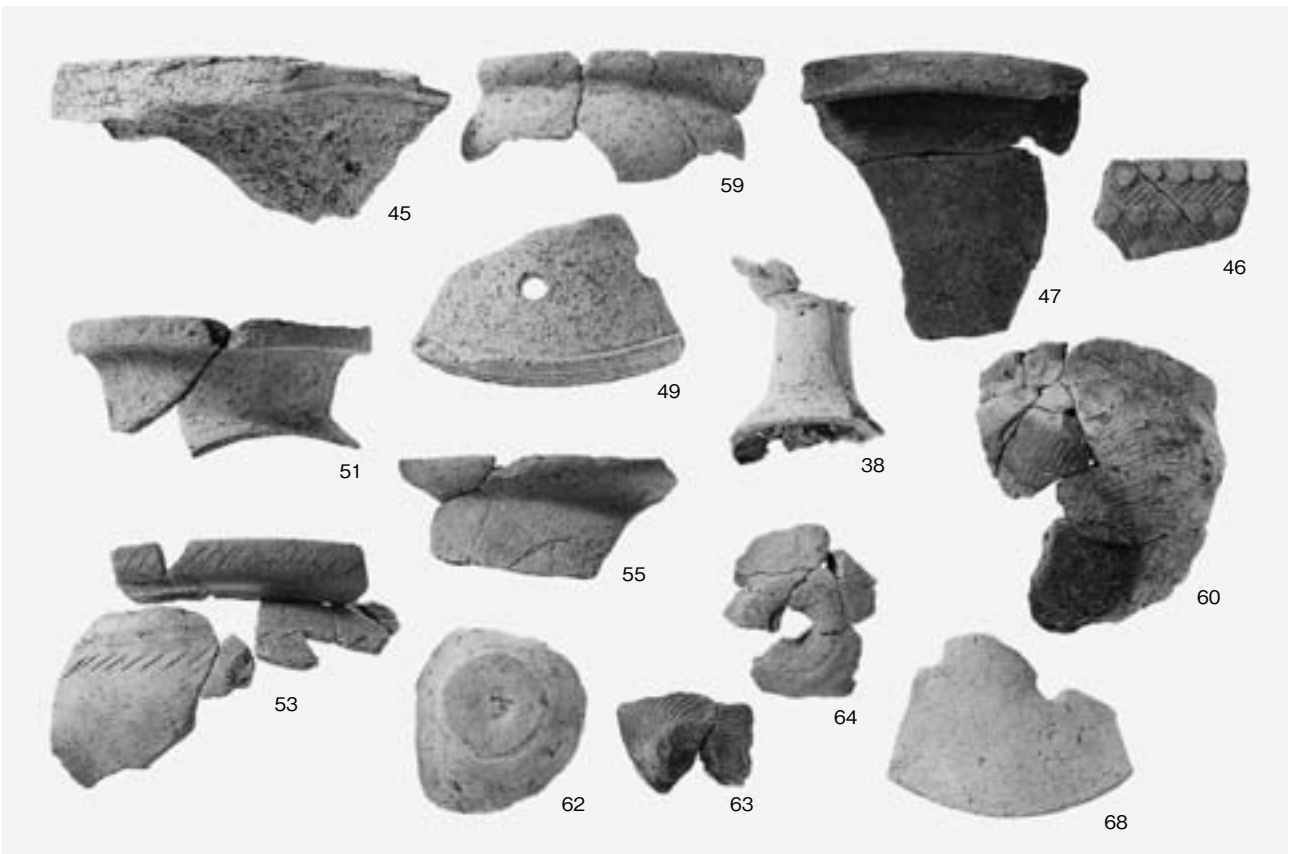
(1) 出土遺物 2



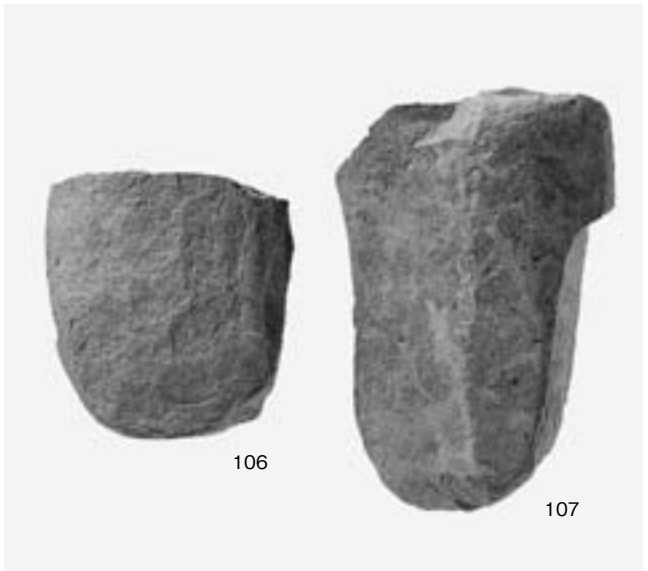
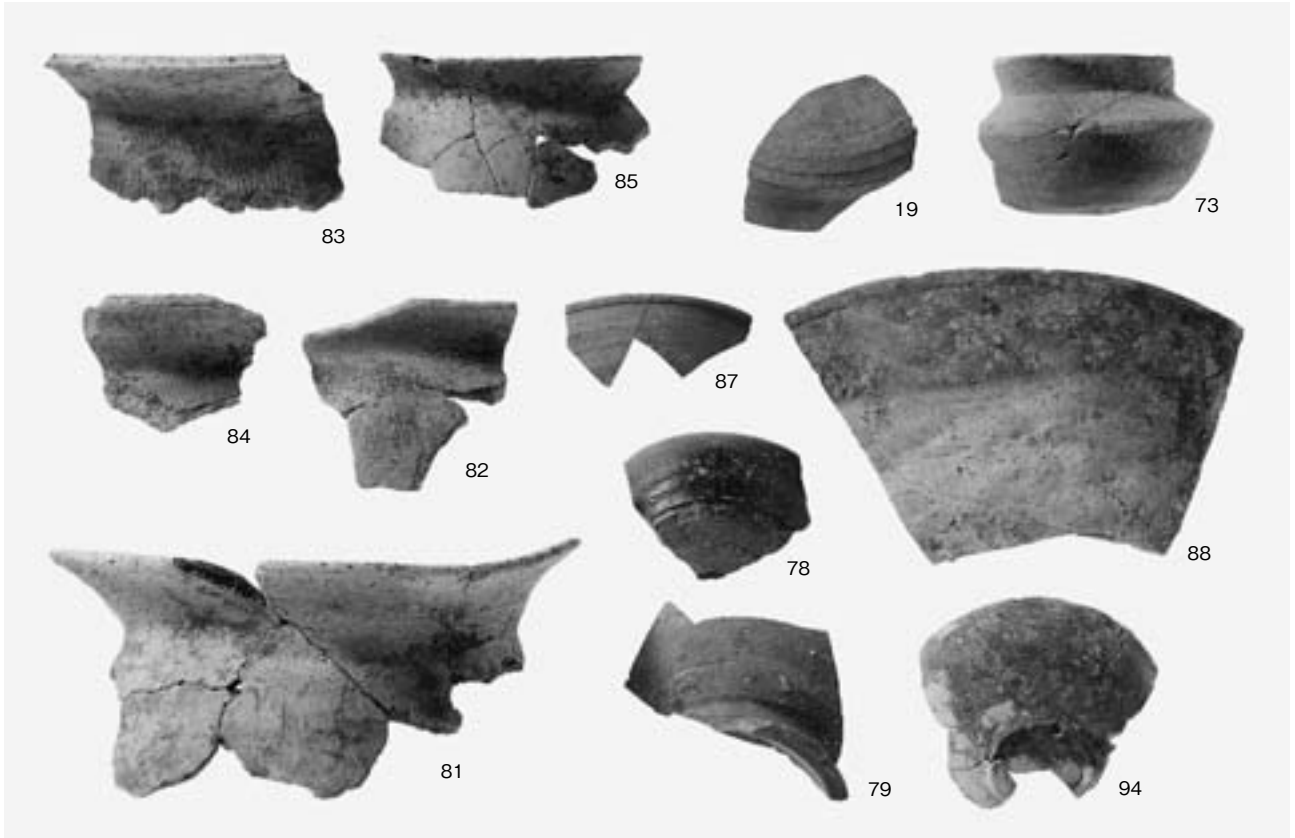
(2) 出土遺物 3



(1)出土遺物 4



(2)出土遺物 5



京都府遺跡調査報告集 第 141 冊

平成22年3月31日

発行 (財)京都府埋蔵文化財調査研究  
センター

〒617-0002 向日市寺戸町南垣内40番の3  
Tel (075)933-3877(代) Fax (075)922-1189  
<http://www.kyotofu-maibun.or.jp>

印刷 三星商事印刷株式会社

〒604-0093 京都市中京区新町通竹屋町下ル  
Tel (075)256-0961(代) Fax (075)231-7141